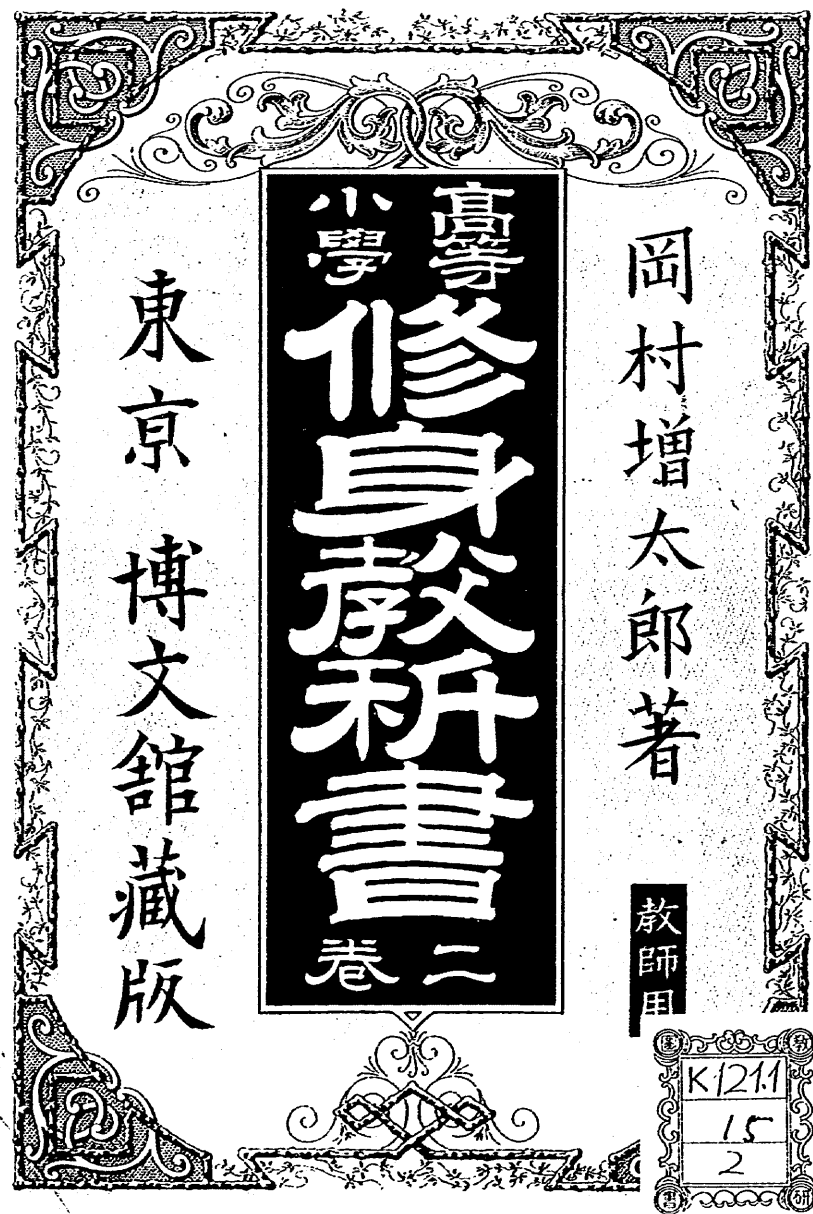
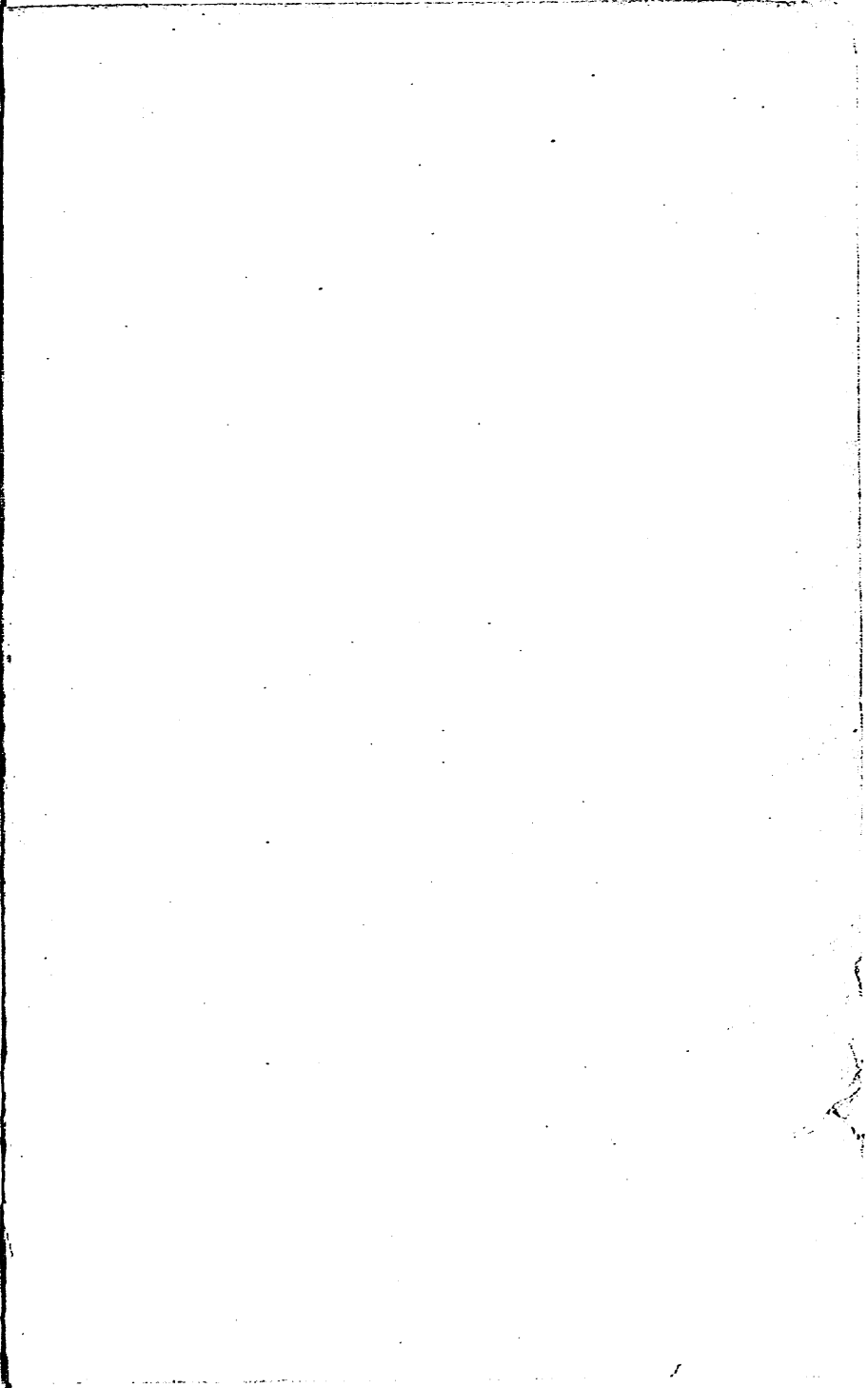
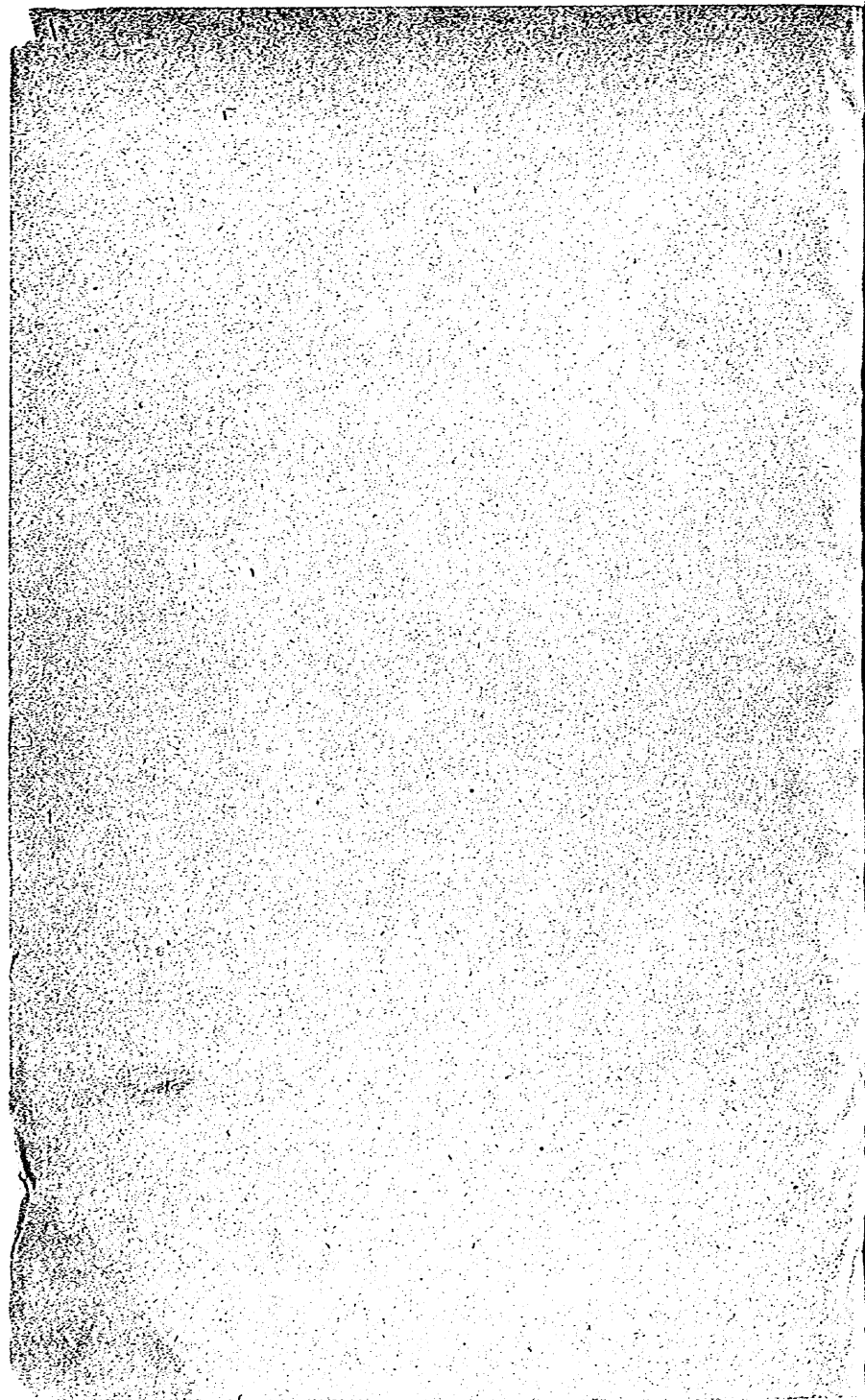




K121.1

15

2



岡村増太郎編

教師用



高等小學
修身教科書

二卷

東京

博文館藏版



高等小學修身教科書教師用第二卷目次

孝行	一
友愛	三
交友	七
信義	一〇
謹慎	一四
正直	一六
謙遜	二一
節制	二四
廉潔	二六
忍耐	三〇
公平	三三
尊王	三六
勤學	四四
愛國	四七

立	志	五〇
仁	慈	五三
勉	職	五六
義	勇	五九
改	過	六三
習	慣	六七
貞	淑	七〇
孝	行	七三
沈	勇	七八
勤	勉	八一
攝	生	八四
節	儉	八八
惜	陰	九一
自	助	九五
友	愛	九九
友	誼	一〇二

尊	王	一〇五
敬	長	一〇九
交	際	一一三
謹	慎	一一七
克	已	一二〇
寬	大	一二二
清	廉	一二六
貞	淑	一三〇
敬	師	一三三
果	斷	一三七
愛	國	一三九
孝	行	一四二
友	愛	一四七
信	義	一五一
勤	學	一五五
義	勇	一五九

勉職	一六三
謙遜	一六七
忍耐	一七〇
處事	一七三
博愛	一七七
忠節	一八二
廉潔	一八四
寛大	一八七
義勇	一九一
立志	一九七

高等修身教科書教師用第二卷目次 終

高等
小學

修身教科書

高等第二級
教師用

岡村増太郎編

孝行

家光の例
を問ひしに

徳川家光の將軍秀忠の子あり、家光十二歳の時秀忠に従ひて猿樂を観る、群臣皆側へ待せり、會地大に震ひ群臣皆慌てゝ避けし、獨秀忠のみ嚴然として動かざり

家光時、屏風を隔てゝ坐せり、青山忠俊之を抱きて出、家光忠俊に問ひて曰、嚴君既へ出でたまひしか、忠俊對へて曰、未知らず、家光大に怒り忠俊の頭を批ちて曰、嚴君の未出でたまはざるに、吾安んぞ獨避くべけんやと、聞くもの皆歎服せり。

(格言) 父母子を愛する心未嘗少しも置かず、人の子親を愛する心も、亦跬歩も忘れざるべし。(學勉)

(教授要旨)

- (一) 父母たるもの、寸時も子の身を思ひて忘るゝ間なければ、子たるものも亦親を思ひて一たび足を舉ぐるゝも敢之を忘るべからざるべし。
- (二) 子たるもの、危難に臨みて、獨其の身を善くして、父母を忘るべからざるべし。
- (三) 子たるもの、危難に臨みて、假令父母に代りて死するゝあるも、父母の危きを視て己獨身を全くすべからざるべし。

(教授方法)

例話を平易に説述して、家光の父の様子を問ひし處に於きて、愛親の情を喚起し、格言に歸納して其の觀念を鞏固すべし。

(問詞)

- (一) 家光は、忠俊に抱かれつゝ、如何なることを問ひしや。
- (二) 忠俊の對を聞きて、家光は如何にせしぞ。

(應用問詞)

- (一) 白刃を提げて危害を、父母に加へんとする者ある時、如何すべきや。
- (二) 父母、若傳染すべき惡疾に罹りし時、如何すべきか。

(作文題案)

- (一) 親の子を思ふ情
- (二) 子の親に對する心得
- (三) 遠方にある父母の安否を問ふ書牘

友愛

(例話) 岩佐岩吉は阿波國那賀郡下福井村の人なり、安政

根本を培養
すとい如何
なることか

六年、兄唯吉より田畠の分與を得て別家を建て、農業の外、絞油を爲し、又荒物等を賣りて生計を立てけるが、性質篤實にして晝夜勉勵せしうは家産次第に富みけり、岩吉は全く兄の恩義に因れりと思ひ、乃初め分與せられし田畠を兄に返さんと欲し、之を唯吉に語るに、唯吉は一旦分與せしものなれば取るべきにあらず、と辞退せるを根本を培養して基礎を堅固とするの策なり、と遂に兄に返したり、藩主之を聞き深く岩吉の友弟を賞せしと云ふ。

(格言) 人の兄となりては、慈愛として友を見る、人の

弟となりては、敬誦して悖らず。(荀子)

(教授要旨)

一) 兄弟の父母を同じくして、生れしものにて、恰同根の樹の如きものあ

れば、相愛せざるべからざることを。

(二) 兄弟の父母に亞ぎて、弟妹を庇護すべきの責任あるものなれば、常に子の如く慈愛すべきこと。

(三) 弟妹の兄弟の保護を仰ぐべきものなれば、常に親の如く敬従すべきこと。

(四) 兄弟姉妹たるもの、常に此の心を以ちて相接すれば、友愛の情自然に厚きを加ふること。

(教授方法)

兄弟姉妹の血族中尤重すべきものとして、艱難急戚に臨みては、假令他人の懇篤を援助するあるも、兄弟姉妹に若かざることを等を教諭し、以ちて永く懿親の情を失はざらんことを切實に教授して、格言の旨意を敷衍し、例話を據りて感情を惹起せしむべし。

(問詞)

(一) 岩吉の弟の身分を以ちて如何にして、一家を立てしや。

- (二) 岩吉は、如何なる事に因りて家産を殖せしや。
- (三) 岩吉は、何を以ちて兄に田畠を返さんと思せしぞ。
- (四) 岩吉は、兄の固辞するも拘はらず、強ひて田畠を返さし、何故か。

(應用問詞)

- (一) 家貧として、兄弟たるもの勞働して、弟妹等に衣食せしむる時、弟妹たるもの、如何すべき。
- (二) 又、家貧として、兄弟たるもの病臥す時、弟妹たるもの如何すべき。
- (三) 兄弟若、弟妹を愛せざる時、弟妹の之に對する行、如何。
- (四) 弟妹順從せざる時、兄弟たるもの如何して可なりや。

(書取題案)

(一) ロノトナリテハ、ロニシテロヲ、ロノトナリテハ、敬謝○○

悖○○

(作文題案)

(一) 兄弟相互の關係

(二) 遠地に在る兄弟の安否を問ふ書牘

交友

(例話)

徳川家康關ヶ原の役後、其の功を賞して諸侯に封邑を加ふ、井伊直政、本多忠勝、印書を受けずして頗不平の言あり、永井直勝、直政に向ひ、卿等、徳川氏柱石の臣なるに、尙祿を貪らんと欲する、何事ぞや、と責め諭しける、直政憤然として、我が輩萬死を犯し百戰を歴たる大功を以ちて、其の賞反りて外諸侯に及ばず、安んぞ怨みざるを得ん、と云ひければ、直勝重ねて吾が曹の世臣なり、唯主君の使はるゝまゝにせむ、何の怨むることあらん、外諸侯は各自其の力を以ちて家を成す、而して今我が爲に勞せ

直勝の直政に言ひし言葉の如何

益友といふ如
何なる所を
か謂ひしもの

るものなれば、主君厚く之に報せざるを得ずと云ふに直
政大言して、直勝微輩尙我と抗せんと欲するか、と曰へば、
直勝冷笑して直勝をして子の兵馬を蓄へしめば、一步も
子に譲るべからず、然るに遽に傲りて此の言を爲す、愚も
亦甚し請ふことより絶ん、と云ひ袂を奮ひて出でたり、直
政尋ぎて感悟し自忠勝に諭して印書を受けしめ、徑に直
勝の許に至り、謝して曰、子は誠に益友なり、と是より相與
に斷金の友と爲れり。

(格言) 二人心を同じくすれば、其の利金を斷つ、同心
の言其の臭蘭の如し。（易經）

(教授要旨)

(一) 明友の誠心を以ちて相交るべきこと。

(二) 誠心を以ちて相交り、務めて同体一心の如くすべきこと。

(三) 朋友過ちある時、諄々忠告して善に導くべきこと。

(教授方法)

二人始め相争ひ相怒りたりしに、遂に斷金の友と爲るに至る、最好話
なれば能く注意して説話し、更に要点を問答して、生徒の感情を喚起し、
而して格言に歸納すべし。

(問詞)

(一) 直政忠勝の、何故に不平の言ありしや。

(二) 直勝の、二人に如何なる言を以ちて諭せしや。

(三) 二人の、直勝に如何なる答を爲ししや。

(四) 直勝の重ねて諭せし言の、如何。

(五) 二人の、遂に直勝の諫を服従せしか。

(六) 直政と直勝と、斷金の友たりし、何故ぞ。

(應用問詞)

(一) 朋友若我を誘ひて、惡事を爲さんとする時、如何すべき。
(二) 我過ありて、朋友之を忠告せる時、如何。

(書取題案)

(一) □□□□チ□□シ スレバ □□□□チ□□□□□□□□□□シ

(作文題案)

(一) 朋友の義務

(二) 信義

(三) 朋友より忠告せられしを謝する書牘

(四) 朋友の不幸に遭遇せしを慰むる書牘

信義

(例話) 豊臣秀吉、蒲生氏郷を會津に、木村秀俊を葛西大崎に封ずる時、二人を誡めて曰、卿等今より境を遠國に接し

氏郷此の言を聴きし如く何にせしと思ふや

て親むのもあるなら、而して奥羽地方の人心未測られず、宜しく兄弟の交誼を結び、緩急あらば相携へて事に當るべしと、二人封に就き未幾ならずして、秀俊部下の民亂を作し、秀俊孤城を保ち、奥羽の間大に亂れたり、氏郷直に往きて之を救はんとせしに、或る人諫めて曰、今や隆冬雪深くして路を塞けり、往くも利あらざらん、況や此の亂の原、伊達氏の煽動する所に因れり、是亦備へざるべからずと、氏郷曰、身の全きを謀りて秀俊を救はず、若之をして敵に餌せしめば、何を以ちて太閤の依託の言に答へん、況や人已に兄を以ちて吾を待つ、然るに弟を死地に陥れて救はず、人道其安くしかあると、遂に進みて賊を殲じ、秀俊を救ひ出し、而して其の軍機敏なるを以ちて伊達氏動くこ

氏郷の義と
如何なる
行を指せし
ものなるか

と能はず、是に由りて大に義名を博したり。

(格言) 人と約せば信を失ふと勿れ、一度信を失は

ば、人よあらずと思ふべし。(大和俗訓)

(教授要旨)

(一) 人と交るには言必信あるべきこと。

(二) 言信なき時は遂に入々の擯斥を受くべきこと。

(三) 故に又人と約するに決して輕々しく言を交ふべからざることを。

(教授方法)

信義の人間萬事の基礎なるものなれば、尤言を重んじ言行反覆表裏をきを要するの意を以ちて格言を十分説明し、然る後例話と據り、古人の美行を談話して、感奮の情を開發すべし。

(問詞)

(一) 秀吉は、氏郷秀俊を誡むるに、如何なる言を以ちてせしや。

(二) 秀俊部下の民乱を作せし時、氏郷の舉動は如何。

(三) 或る人の如何なる言を以ちて、氏郷を止めんとせしや。

(四) 氏郷は、或る人の諫に對して、如何なる言を以ちて答へしか。

(五) 氏郷の義名を博せし所以は、如何。

(應用問詞)

(一) 人と約束せし事、若故障ありて之を行ふこと能はざる時、如何すべきや。

(二) 人若我に對するよ不信を以ちてせば、我の之に對する行、如何。

(書取題案)

左の假名文を漢字交りに改書せしむべし。

(一) ひどど、やくせば、しんを、うしなふことなかれ、いちど、しんをうしなば、ひとにあらずと、おもふべし。

左の句を口誦して、書取らしむべし。

(二) 兄弟の誼を結び、緩急相救ふべし、雪深くして路塞り、其の領地

を治めけり

(作文題案)

- (一) 朋友の情誼
- (二) 朋友より明日の課程を問はれしに答ふる書狀

謹 愼

(例話)

此の時趙槩
如何に爲
やしと思ふ

支那宋の代に趙槩といふ人あり、歐陽修と同官たりしが、槩は天資重厚にして言語寡し、修屢之を輕じ侮れども、槩更に意に介せざりき、後會修過ありて、其の事遂に帝の上聞し達せしかば、帝大に怒り痛く其の罪を行はんとせしに、同僚の人々敢修の爲に其の冤を辨するものなかりしを、槩は平生其の交深からざるにも關せず、帝を諫めて遂に其の罪を免さしめたり。

(格言) 憎むとも、憎み返すな、憎まれて、憎み憎まれ、は

てしなけれバ。(善惡種時鏡)

(教授要旨)

- (一) 平生の言行を謹み、慎重自持すべきこと。
- (二) 苟喜び、苟怒り、苟且輕率の言行あるべからざること。
- (三) 他人一時の毀譽を以ちて、終身其の人を是非をべからざること。

(教授方法)

喜怒哀樂の人の物に應じて起るべき性情なりと雖、慎重以ちて之を處せざれば、妄言暴怒事を誤り、害を招くことあるを以ちて何事を爲せにも、謹慎を專一とすべきの意旨より、格言を講明して、然る後例話に入り、生徒の觀念を精確すすべし。

(問詞)

- (一) 趙槩は、如何なる性質の人ありしや。

- (二) 趙樂と歐陽修と平生の交り、如何なりしか。
- (三) 歐陽修の罪に抵らんとせし時、趙樂の如何せしぞ

(應用問詞)

- (一) 同校の生徒、我に對して不敬の振舞ありし時、如何にすべき。
- (二) 平生、我に不敬を加へつゝあるものゝ、學校の歸途病起るか、或怪我なせし時、我如何にすべきや。

(作文題案)

- (一) 油斷大敵

正直

谷平は何商賣せしや

(例話) 上野國新田郡酒井村の、毎年秋の社日に當り肆を張りて市を爲す、尾嶋村に販魚者谷平と云ふものあり、市に之く途に安養寺を過ぐ、墓樹の上に群鴉喧噪すること

谷平の此の金子を如何にすと思ふや

谷平再問ふも卯兵衛は遺せしことを云ふ谷平は此の金子を如何にすと思ふや

甚じきを見る、谷平以爲へらく墓間何の怪異あると、旋行して之を覗ふ、文蛇あり碑間に横る、谷平謂へらく是かりと、見ること久しけれども蛇動かす、漸就きて之を視れば、則棉絲綵繒なり、之を牽けば布囊出づ、中に金五拾兩あり、封題して卯兵衛と曰ふ、谷平大に駭きて以爲へらく、安養寺村に於きて多貲なるもの唯一の卯兵衛あるのみ、渠市に適きて之を遺せるならんと、乃其の金を懷にして往く、卯兵衛果して市に在り、谷平疾呼して問ふ、卿遺す所なきやと、卯兵衛頭を掉ひて否々と曰ふ、谷平以爲らく、衆人の中に於きて之を言ふ吾が過ちなりと、乃茲を去り市散じて復往き就きて問ふ、君遺す所なきやと、卯兵衛曰、否々、谷平以爲へらく、猶他人の室に在るを以ちてなり吾復

卯兵衛は是
に於きて如
何にするか

過てりと、亦茲を去り其の歸るを時として、其の家に踵り
見んとを請ふ、卯兵衛曰、何の言ふ所ぞ、谷平曰、卿必遺す所
あるべし蓋ぞ我が爲し之を言はざるや、卯兵衛曰、否々、谷
平愠りて曰、五拾兩の金題して卯兵衛とあるの君にあら
ずして亦何れの卯兵衛ぞと、囊を取りて其の前は投じ、因
りて以ちて金を得たる所以の狀を告ぐ、卯兵衛敢金を受
けずして曰、こき我こきを遺す既に吾の有にあらす、而
て子こきを拾ふ即子れ財なり、吾何ぞ與ふんや、と谷平曰、
吾これを拾ふはあらざるなり、之を君に還さんと欲する
が故に之を擧げたるのみと、辨論數回兩人固く相譲り肯
取らず、卯兵衛手を交又して思ふと稍久しくして曰、子強
辨して我に抗するも亦天は抗するかと曰、能はず、卯兵衛

谷平は何故
に趨り出で
しか

曰、金人の重んずる所而して我偶之を遺す豈天に非ず
や、鴉噪ぎ蛇偃し子を導きて之を拾はしむ亦天なり、卯兵
衛は天は違ひ而して金を取ることを得ず、子も亦安んぞ
天は違ひ而して金を還すことを得んやと、谷平嘿然たる
こと久し、乃曰、谷平天に違はず、天地人をして之を拾はし
むれば、則他人の有あり、谷平は義苟取らず、拾ふことあれ
ば必其の主を訪ひて之を還すものなり、今苟之を取らざ
るの谷平をして之を拾はしむ、谷平乃其の主を訪ひて之
を還すこれ天の道を奉ずるなり、卿焉んぞ復辭すること
を得んや、言畢りて趨り出づ、卯兵衛猶囊を提けて之を追
へども及ばず、歳暮に至り米二苞金二分を餽りて、谷平の
壽を爲す、爾後歳々以ちて常と爲し、谷平の身を終らしむ

と云ふ、

(格言) 心は、斯須も正理を離るべからず、身は、斯須も

正直を離るべからず。(説書録)

(教授要旨)

- (一) 正直を以ちて心と爲し、欺き偽る等の行なきを要すること。
- (二) 明暗をもちて行を二つにせり、即正直ならざれば屋漏に耻ぢざるの行を爲すべきこと。

(教授方法)

先例話を平易簡明に談話し、要處に就きて問答して、生徒の思想感発を喚起し、然る後格言に入り、正直の一日寸時も離るべからず、正直を離るれば敗徳者たることを、講明すべし。

(問詞)

- (一) 谷平は、如何なる處まで、財囊を拾ひしや。

- (二) 財囊を、拾ひて如何せしや。
- (三) 卯兵衛は、快く財囊を受取りしか。
- (四) 財囊は、遂に如何になりしか。

(應用問詞)

- (一) 子等學校の歸途に、同校生徒の物品落ち居たり、而して其の傍に人の居らざる時、如何にするぞ。
- (二) 又其の物品の遺し主知れざる時は、如何にするか。

(作文題案)

- (一) 拾ひ物を遺失主に届くる書牘
- (二) 正直の頭に神やぞる
- (三) 遺失物を届けられしを謝する書狀

謙遜

子等ハ斯の
如き行を如
何に思ふや

(例話)

恩田鶴城は下總の國古河の人なり、幼き時群兒と戯るゝふ、爭ひ鬭ふことあまは毎に其の曲直を判して群兒を服從せしめたり、之を以ちて常に頗自負の心を抱けり、年十二、三の比、自其のよからざることを悟り、矯るに恭遜を以ちて、能く故習を變せしこと、老成人の如くなり、後古河侯の儒官と爲きり。

(格言)

今人の病痛は只これ一箇の傲の字、千罪百惡皆傲より生ず、謙抑は乃これ對症の藥なり。

(教授要旨)

- (一) 己の才智藝能、人より長ずるも、必自負して倨傲なるべからざること。
- (二) 傲慢ハ敗徳の行にして、人々の憎怨を受くること。
- (三) 謙遜ハ人の美德として、才智藝能却りて之に因りて益光輝を發し、他

(王陽明)

人の尊敬を受くること。

(教授方法)

自慢ハ己を傷るの基にして、謙遜ハ即ち己を成すの意義を以ちて、例話を平易に談じ、問詞により其の感想を鞏固よし、然る後格言を講述すべし。

(問詞)

- (一) 鶴城ハ幼き時如何なる行を爲去しや。
- (二) 十二三の比如何に變せしや。
- (三) 遂に如何なる人となりしや。

(應用問詞)

- (一) 學藝一學年の生徒ハ優れ、試験毎ハ首坐を占むる時ハ如何。
- (二) 學藝の已に若かざる人を遇するに如何すべき。
- (三) 自慢高慢馬鹿の中、といへる諺あり、如何なる意味か。

(書取題案)

□□ノ□□ハコレ□□ノ□□□□□□倣○○生○○□□ハ乃コレ
對症○○○○

(作文題案)

(一) 謙遜と卑屈との別

節制

民事國用
金錢を各
ぞさるゝ何故

(例話) 中納言徳川光圀ハ水戸の城主なり、平日粗食を食
ひ粗衣を服せり、曾縮緬の紗巾を製せしは四十年も用ひ
たり、且居室の四壁は反古を以ちて貼り付け、少しも彩色
としてゐらざりし、然れども民事國用に至りては少しも
吝む所なし、鳥獸草木の領内になきものは、必これを他領
より求め、或外國より取り寄せて畜ひ養ふ、常に曰、我多く遠

物を集むる豈私玩の爲ならんや、唯一草一木にても多く
日本より化育すること欲てなりと。

(格言) 奢と吝とは、跡異として其の心同じ、皆一心の
慾より生ず、人よく此の慾を制すれば、此の累
なし。(池田光政)

(教授要旨)

(一) 常に慾情を節制して、奢侈に失し、或鄙吝に陥らざるを、要すべきこと。
(二) 奢侈と鄙吝との、共に邪念として、遂に其の身を誤るに至ること。

(教授方法)

慾情ハ常人をして邪僻に陥らしめ、爲に正しき道を踐み、正しき業に
服し、以ちて身を立つること能はざらしむるものなれば、慾の一念僅に
動けば、是即其の身の既に邪道に陥るものなりとなし、務めて之を抑制
せざるべからざる等の事柄を以ちて、格言を説明し例話によりて引證

すべし。

(問詞)

- (一) 光園卿の平日如何に節儉せられしや。
- (二) 如何なる事よても、金錢を費されざりしか。
- (三) 廣く、鳥獸草木を集められしに、如何なる意ぞ。

(應用問詞)

- (一) 吝嗇と節儉と、如何なる區別ありや。
- (二) 節制と、如何なる意義なるか。

(作文題案)

- (一) 儉約と吝嗇との區別
- (二) 奢侈の害
- (三) 知友の奢侈を戒むる書牘

廉潔

中井積徳の
人となり
を問ふ

(例話)

中井積徳の履軒と號す、大坂の人にして儒を以ちて著る、志氣高尚にして荷人の意を迎へ其の喜びを取らず、平生妄り戸外に出でず、自幽人と號せり、其談論奇警にして動もすまは人を駭かす、少より老に至るまで經書の意義を考察し手に卷を釋かず、積徳嘗骨董舖を過ぎ、古鐔を見て其の價を問はず、方銀四個を與へて買はんとしけき、舖主曰、此の物の價安きものなり如何で多額の銀を受けんやと云ふを、積徳強ひて之れを與へ鐔を買ひて歸れり、門人一見して大に歎じ此の奇代の嘉品なり、願くは方銀八個を以ちて之を譲られたと云ふに、積徳初めは聽かざりしが、強ひて乞ひけれを其の意に任かせ、餘りし所の四個の方銀を懷にし、再舖に至り之を與へけき、

再四方銀を
舖主と與ふ
るは何故ぞ

舗主怪みて其の跡を追ひ審に居所を尋ねしに、大儒履軒ありしかば、金を還すも必受けざるを慮り、鮮魚を籃に入を未明に其の家に投じて去りたり。

(格言) 廉なるものは、求むることなく、欲することなく、奪はず、貪らず。(人事通)

(教授要旨)

- (一) 潔白を旨として、貪汚の行を爲すべからざること。
- (二) 假令困難に處し、貧苦に迫るも、一点貪濁汚穢の振舞あるべからざること。

(教授方法)

例話を説きて切實ある處に至り、問詞を以ちて生徒の感覺を喚起し、格言に據り廉潔の意義を反覆講明し、或は應用問詞を以ちて感念を精確ならしむべし。

(問詞)

- (一) 履軒先生の人と爲りし、如何。
- (二) 先生の古鐔を得られし由來し、如何。
- (三) 先生は何故に再四方銀を、舗主に與へられしや。
- (四) 舗主は何を以ちて鮮魚を、先生の家に投じて去りしや。

(應用問詞)

- (一) 故なきに、朋友我に物品を饒る時、如何するや。
- (二) 途中にて、物品を拾ひし時、如何にすべきか。

(書取題案)

- (一) □ナルモノハ□ムルコトナク□スルコトナク□ハズ□ラズ

(作文題案)

- (一) 取るべきものにあらざれば取らず
- (二) 知らぬ人より物を贈られしを返却する書牘

忍 耐

(例話)

何故に富弼
を聞かざる
まねして過
ぎしや
罵るもの慰
あるか

支那宋の世に富弼と云ふ人あり、其の子弟に教へて曰、忍の一字は衆妙の門なり、若清儉の外に又一の忍の字を加へなば、如何なる事にても辨せざるをなかるべしと、弼年少き時參知政事といふ官を勤めけるに、一日人あり罵りて曰、此の子も亦參政の官と爲り居るやと、弼伴り聞かざるまねして過ぎければ、其の友之を告げしに、弼答へて曰、他人を罵りしものなるべし、友曰、否彼明君の名を呼べり、弼曰、天下の廣き豈同名のものあからんやと、罵りしもの之を聞きて大に慙ぢたり。

(格言)

大なる過は、少しの忍びざるより起る。(帝徳集)

(教授要旨)

- (一) 忍耐は、事業を成就せしむる基礎なること。
- (二) 忍ぶこと能はざるものは、事業成就せざるのみならずして、又是に因りて大なる過失を引き起すべきこと。
- (三) 忍ぶこと能はざるものは、能く艱苦に甘んじ、危患を踐むの勇氣なきこと。

(教授方法)

能く忍ぶものの速成を期せずして遠大を圖る故に、或垢を含み耻を蒙り、或艱難に當りて辞せず危殆に遇ひて甘んずるものなり、との意義を以ちて格言を講述し、忍耐の即成功の母たる觀念を開發し、更に例話によりて古人の通常忍ぶ能はざる事を忍びし事實を平易に談話し、問詞或應用問詞を以ちて生徒感覺の精確を要すべし。

(問詞)

- (一) 富弼は如何なる訓誡を子弟に施さしや。

- (二) 或る人富弼を罵るの言ハ如何。
- (三) 富弼ハ友人の告ぐるを聞きて如何にせしぞ。
- (四) 富弼ハ友人の再其の名を呼べりと言ふを聞きて如何にせしか。

(應用問詞)

- (一) 忍耐ハ何故に事業を成就せしむるか。
- (二) 突然來りて子の頭を打つものありし時ハ子如何ニ之を處置せるか。

(書取題案)

- (一) ロナルロハロシノロビザルヨリロル。

(作文題案)

- (一) ならぬ堪忍するが堪忍
- (二) 短氣は損氣
- (三) 短氣なる友人を戒むる書牘
- (四) 知友より短慮なることを戒められしを謝する文

公平

(例話)

孝徳天皇は、御性質賢明にまゝせしが、下情の上通せざることあらんを恐れ給ひ、御即位の初めに當り、鐘と匱とを朝廷に設けさせ給ひ、詔りしてのたまはく、凡憂へ訴ふるの人は、伴造あるものハ伴造先議して後に奏せよ、尊長あるものは尊長先議して後奏せよ、如伴造尊長達せざるものハ、牒を匱に納きよ、味爽有司執りて之を上り、朕親年月を記して群卿と共に議し、其の伴造を罪せん、官司或阿黨稽留して、割斷直らざるものあらば當に鐘を撞くべし、天下の民をして咸朕が意を知らしめよと、百姓言路の通じ、事情の公平に歸することを悦べり、

鐘と匱とは如何なる用の供するものありや

(格言) 朕が心に適すればこそ、悪人を近けず、朕が心に違へばこそ、善人を棄てず。(後土御門天皇)

(教授要旨)

- (一) 人は常に公平を以ちて心と爲し、事に應じ物に處する、偏私あるべからざることを。
- (二) 大公至平の道理の存する所を觀て、決して己の喜怒に因り、事物を處理すべからざることを。
- (三) 偏私の行爲は、人服せずして、遂に憎怨を招くべきことを。

(教授方法)

鏡の公なるが故に、美醜を論せずして照映し、衡の平あるを以ちて、輕重を議せずして稱量す、故に公平を以ちて事を處し物に應せば、人々悦服し事業隨ひて成るを得る等の旨意を懇諭し、演繹的に教授すべし。

(問詞)

- (一) 孝徳天皇の鐘と匱とを朝廷に設け給ひし旨意は、如何。
- (二) 鐘匱の設けありて、百姓の悦びしは、何故ぞ。

(應用問詞)

- (一) 子等、今二人の友と嬉戯する内、一人の兒童は、昔數子に物品を與へ、子の意に適合したるものあれば、此の兒童は性質餘り良らざるものあり、而して他の一人は、子と平素甚親密あらざれば、其の品行は頗端正あり、子は此の二人を待遇するに如何とぞ。

- (二) 孝徳天皇は、何代にあたらせたまふや。

- (三) 孝徳天皇の御事に、つき、歴史上にて知り得たることを、話せ。

(書取題案)

- (一) ガロニロ スレバ トテ □ □ ナ □ ケズ □ ガ心 ○ □ ヘバ トテ □ □ ナ □

(作文題案)

- (一) 偏頗

- (二) 事を處するに愛憎あるべからず
(三) 奉公人取扱の心得

尊王

高山彦九郎
の何地の人
なりや

(例話) 高山彦九郎、名は正之、字は仲繩、上野の國新田郡細谷村の人なり、幼にして孤となり、祖母の爲に鞠る、年甫めて十三の時、太平記を讀みて、後醍醐天皇中興の業遂げず楠、新田、北畠等の諸將、志を齎して空しく死せるを見、慨然として憤りを發し、頗功名の志あり、年十八にして京師に遊び書を讀むこと二歳、乃出でて都下の書生を見、交通に廣く、名聲大に籍き、高門巨室多く布衣の交りを爲す、名卿中山大納言も、亦其の人と爲りを奇として、善く之を遇す、是に於きて彦九郎四方に周遊し、至る所必賢豪長者に交る、既にして上野に歸る、彦九郎身の長八尺餘にして、鬚髯神の如く、高邁にして奇節あり、議論英發、忠誠にして人を動す、菅室直清が著す所の書を見て、其の楠公の召に應じて直に笠置に造るを以ちて度量足らずと爲し、漢の諸葛亮の三顧の後、乃廬を出でて事を引き、以ちて之を議するに至り、憤然として罵りて曰、腐儒何ぞ事を論ずるの迂なるや、元弘の時、三國と年を同じくして論ずべけんや、劉漢の末、天下分裂し、豪傑並び起る、此の時、當りて劉玄徳の故履を販り、席を織るの人、自稱して漢室の裔と曰ふ、豈能く其れ眞妄を辨せんや、亦猶今世奴婢輩の號して源平と稱し、以ちて自誇るものゝ如し、孔明の三顧して出

高山彦九郎
の狀貌如何

劉玄徳は如何
ある人か

す、是に於きて彦九郎四方に周遊し、至る所必賢豪長者に交る、既にして上野に歸る、彦九郎身の長八尺餘にして、鬚髯神の如く、高邁にして奇節あり、議論英發、忠誠にして人を動す、菅室直清が著す所の書を見て、其の楠公の召に應じて直に笠置に造るを以ちて度量足らずと爲し、漢の諸葛亮の三顧の後、乃廬を出でて事を引き、以ちて之を議するに至り、憤然として罵りて曰、腐儒何ぞ事を論ずるの迂なるや、元弘の時、三國と年を同じくして論ずべけんや、劉漢の末、天下分裂し、豪傑並び起る、此の時、當りて劉玄徳の故履を販り、席を織るの人、自稱して漢室の裔と曰ふ、豈能く其れ眞妄を辨せんや、亦猶今世奴婢輩の號して源平と稱し、以ちて自誇るものゝ如し、孔明の三顧して出

高山彦九郎
は室直清の
著書と如何
よせしむ

づる、我が心は於きて猶以ちて速なりと爲す、百願二百願を累ぬるも猶未緩と爲さず、楠公の如きは則之に異り赫々たる天朝は神の在る所、六合の仰ぐ所、開闢以來神聖相承け皇統一姓之を無窮に傳ふ、普天の下、率土の濱孰か皇民にあらざらん、而して楠公は廷臣の裔にて畿甸の民なり、召命なしと雖、豈國家の難を視て恬然自安んずべけんや、天皇蒙塵と聞き、奮然袂を投じて起つ、安んぞ彼の諸葛輩の爲す所は倣ふことを得んや、書を讀むことを此くの如くなきは百萬卷と雖、何の益かあらんと、其の書を取りて之を堂下に投せり、是の時に當りて、鄂虜數々蝦夷は往來して邊海を窺ふ、彦九郎深く之を憂ひ、躬自北地を歴視して、窺に虜の情を探らんと欲し、遂に意を決して北に遊

彦九郎の塔
下は於きて
歎するは
何故あるか

彦九郎は何
を以ちて死
せりと思ふ
や

ぶ、往きて陸奥の國石巻に至り、後醍醐天皇の塔婆の下に出づ、乃一樵夫を傭ひ水を荷ひて至らしめ、水は浴して禮服を着け、塔婆の下に就き跪き拜し、懷中の文を出して之を讀み、一字終る毎に歎歎して止まざりき、南部津輕を経て松前に至り、竟に蝦夷の境に入り、奔走すること日を累ね、頗足力を極む、既にして京師に還り、後又西海に遊び留ること凡三年にして復京に歸る、之を久しくして遂に意を時に得ず、常に鞅々として樂まざりしが、再西海に遊びて筑後久留米藩森嘉膳の家に宿し、居ること數日、忽病む所あるが如し、一日刀を抜きて腹を屠る、嘉膳見て大に驚き問ひて曰、何爲ぞ此の事を爲す、彦九郎曰、吾常に國家に報いんと欲し、謀る所ありしに、其の忠と爲し義と爲す所

拍手再拜せしは如何ある意ぞ

以のものの今、皆不忠不義の事と爲る、己まん己まん、是吾れ智及ばざるが爲なり、幸に吾が爲に天下に謝せよと、嘉膳之に治療を加ふることを勸むれども聽かず、嘉膳乃曰、吾子を館して子自殺し治療を加へざれば、吾が違法の罪も亦逃るゝ所なし、願はくは官に告げて検視を請へんと、彦九郎之を許す、暫くして東方を指し問ひて曰、帝都及故國へこれかと、嘉膳爲に東北を指示す、彦九郎拍手再拜して、嚴然端坐し談話平生の如し、既にして更來りて之を檢し齎す所の物を閱するに、唯天下の名山大川勝區の圖畫、及忠臣孝子の行狀、名家送る所の詩文のみにて、毫も疑ふべきものなり、曉に至りて命絶つ、年四十餘にして實に寛政五年なり、明治維新に至り朝廷其の志を嘉して、位を贈ら

き高山神社の號を賜ひ後復贈位せられけり。

(格言) 窮りあるべからざるは、我が國を傳ふる寶祚

なり、仰ぎて、たふさみ奉るべきは、日嗣を、うけたまふ、君になん、おはします。(神皇正統記)

(教授要旨)

- (一) 我が皇室は漢土西洋と異りて、開闢の初めより今日に至るまで、御一系の御血統よて代々日本國に君臨したまひ、寶祚の隆あること當に天地と共に窮極あかるべき、最尊き主君よおはしますこと。
- (二) 皇室は、即我々臣民の頼りて以ちて、安寧を保ち幸福を得るに、必缺くべからざるものたること。
- (三) 我々臣民の祖先も亦皇室に奉仕して、其の御恩を蒙りて生活せしこと。

(四) 我々臣民は祖先より嗣ぎて世々忠貞の美を濟し、以て皇室の藩屏と爲り、皇室を保護すべきこと。

(教授方法)

我が日本帝國の數千年の古より、我が皇室の君として臨み給ふ所にし我々臣民の祖先の一も其の恩澤を被らざるものなし、我が帝國の帝國たる所以は實に皇室の能く其の尊榮を保ち給ふにあれば、吾々臣民は皇室の尊榮の一点も汚れあからんやう、念々皇室を忘るゝことなく、飽く迄忠義の心を勵し、益々帝國の光りを輝かすべきに、我々臣民の分として又先祖以來の大恩を報ゆべき務として、必爲さるべからざるの意を以て、例話を説き緊要の節毎に問答を爲し、務めて此の心を喚起し、然る後格言を講述し、重ね々皇室の尊嚴と臣民の忠勤とを十分腦裡に印象せしむべし。

(問詞)

(一) 彦九郎の慨然憤りを發して、忠勤の心を惹き起せしに、如何ある事に

因りしか。

- (二) 室直清の著書に就きて、彦九郎の意見に、如何。
- (三) 彦九郎の蝦夷に入りしに、何故ぞ。
- (四) 彦九郎後醍醐天皇の塔婆の下に於きて、如何なる事を爲せしや。
- (五) 彦九郎の屠腹せし所以に、如何。
- (六) 彦九郎の死後、如何ある榮譽を得しや。

(應用問詞)

- (一) 皇室とに、如何なる御方々を、指し奉るべき辞あるか。
- (二) 勤王とに、如何ある事を、爲すか。

(書取題案)

- (一) 窮○○○○○○○○我○國○傳○○資祐○○仰○○○○○○○奉○○○○日嗣○○○○○○○君○○○○○○○○○○

(作文題案)

- (一) 忠節

- (一) 日本の國體
- (三) 紀元節の起因を討ぬる書牘
- (四) 神武天皇祭に人を招く書牘

勤學

了佐の是に
至り如何せ
しと思ふや

(例話) 大野了佐は、性質甚愚にして、父其の家を嗣ぐこと能はざるを以ちて、賤業に就け別は生計を營まらめんとせしかば、了佐、心にこれを耻ぢ、窃は父の友中江藤樹の許に至り、切に其の意を述べ醫を學ばんことを乞ふ。藤樹其の志を哀みて授くるは大成論の句讀を以ちて、誦讀數十遍に及べども了佐一字をも記臆する事能はず。然れども了佐の一心、鐵よりも堅く身力のあらん限り、藤樹の

力に依り、飽く迄此の業を遂げて舊耻を雪がんと、焦思刻苦にて怠らざりしが、藤樹大に其の志の篤きを嘉し、自醫筌を著して之に授く。年幾ならずして、了佐終に醫を以ちて一家を成せり。

(格言) 人、一度して之を能くすれば、已之を百度し、人、十度して之を能くすれば、已之を千度す。

(中庶)

(教授要旨)

- (一) 人の成す所の事、己も亦決して成し能はざることあきこと。
- (二) 勤勉は、即物を成し事を就すの基礎たること。
- (三) 自勉めずして、吾は能はずと謂ふものは、自棄つるものたること。

(教授方法)

例話を説きて、切實に古人苦學の情況を以ちて、十分生徒の感動を惹き

起し、問答に據りて其の念慮を精確にし、然る後不能の二字は、愚人の字書に見ゆる等の語を參証して、格言を講明し、勤勉あれば敏慧のものは、益敏慧に赴き、暗愚のものは敏慧となるの意をも、衍説すべし。

(問詞)

- (一) 了佐は、如何ある事に因りて、書を讀み初めたりしや。
- (二) 了佐が、中江藤樹に就きて、學びし時の景況は、如何。
- (三) 了佐の遂に醫を以ちて、一家を成せしは何ゝ因るか。

(應用問詞)

- (一) 試験毎に落第し、若くは常に一級の末席に居る者は、何故ぞ。
- (二) 怠らず、ゆかば千里の、末もみん、
牛のあゆみの、よし遅くとも、
此の歌意を、事實にあてはめて唱せ。
- (三) 滴りも、絶えねば石に穴をあけどの意は、如何。

(書取題案)

(一) □□□シテ□□□クスレバ□□□□□シ人十度○○之○能○○○
○已之○千度○。

(作文題案)

- (一) 事は勉強にあり、
- (二) 勉強は幸福を生むの母
- (三) 怠惰なる朋友を諫むる書牘
- (四) 弟ゝ勤學の必用を申送る書牘

愛 國

范仲淹の人
どちりは如
何

(例話)

支那宋の范仲淹は少くして大節あり、富貴、貧賤、毀譽、歡戚、に於きて、一も其心を動さず、慨然として天下に志あり、常に自稱して曰、士は當り天下の憂を先ちて、憂へ天下の樂みに後れて樂むべしと、其の將と爲る、持重を務め

て近功小利を急めせず、執政と爲る、倖濫を裁削し官吏を考覈し日夜太平を興さんことを謀れり、性内剛にして外和なり、善を樂み汎く衆を愛す、朝立つ久しきこと能はずと雖、其の己を行ひ事を作すこと、竟に先憂後樂の意に外ならず、死するの日四方聞くもの皆歎惜せり。

(格言) 士は、當に天下の憂を先ちて憂ひ、天下の樂を後れて樂むべし。(范仲淹)

(教授要旨)

- (一) 一國の利害及安危は關する事、身を擲ち家を忘れて、鞠躬盡力之が好處置を爲すべきこと。
- (二) 禍機方は發して始めて之が備へを爲し、災害僅に除きて既に無事を樂むが如きは愛國の士と謂ふべからざること。

(教授方法)

既に身を愛すれば則ち家を愛す、家を愛すれば則ち國を愛すべきは、自然の順序にして國の即ち家々の結合せしものあれば、國を愛するは即ち家を愛するの理を以ちて、愛國の觀念を惹き起し、我が國の世界に勝れて美國なることを説述して、一旦緩急あらば國の爲に生命を擲ちて擁護の任に應るべきの固よりなり、平素に在りても汲々國利民福を企圖すべきことを講説し、例話より格言に歸着すべし。

(問詞)

- (一) 仲淹は如何なる性質の人にて、ありしか。
- (二) 仲淹の恒に誦せし言ひ、如何。
- (三) 仲淹は朝廷に在りて、如何なる事業を爲さしや。

(應用問詞)

- (一) 子等は國と家と、何れか重しと爲すや。

(書取題案)

(一) □ハ □ニ □□ノ □ニ □ナテ □ヒ 天下〇 樂〇 後〇〇 樂〇〇〇

(作文題案)

- (一) 愛國
- (二) 兵役は國民の義務
- (三) 徴兵を忌み嫌ふ朋友を諭す書牘
- (四) 海軍兵學校に入學せしを賀する書牘

立 志

前野良澤の
幼時是如何

(例話) 前野良澤ハ江戸の人にて、幼き時より才智人に優
き長じて學を好みしが、殊に蘭學を好み、自此の學を以ち
て家を起さんぞを志し、長崎に赴き譯官に就きて蘭語を
修め、江戸に歸る後も深く意を辭書に注ぎ、一室に閉居し
て勉強せり、是より學識大に進み其の譽高く、世の尊敬を

受くるに至り、解體新書の如き書の成りしハ、良澤の功
多き居せりと云ふ。

(格言) 事は、必志ありて而して後に成るべし、志は、必
勵み加へて後怠らず。(吳華)

(教授要旨)

- (一) 一切の事業ハ、必先志を立て、然る後成就すること。
- (二) 志既に立てば、如何なる艱難困苦も決して意に介せず、唯其の目的の
ある所に向ひて、直進往行すべきこと。
- (三) 艱難に遇ひて驚愕し困苦に接して躊躇するものハ、志の未立たざる
ものにて、此くの如きハ如何ある事業に着手するも、遂に成し得ざる
べきこと。

(教授方法)

志ハ氣を帥ふるものなれば、志先確然定立する時の氣象も亦奮勵勇發

して、百休皆我が指使に從ひ、事業決して成らざることをなきの意を以ちて、格言を説き去り、然る後例話に入り、立志の必要として、不屈不撓の精神を、鼓舞すべきことを証明すべし。

(問詞)

- (一) 前野良澤の、如何に志を立てしや。
- (二) 良澤は、如何にして學識を、増進せしや。
- (三) 良澤の事業の、如何。

(應用問詞)

- (一) 才智あるも、一の成る事なくして、數其の業を轉じ、其の目的を變ずるものあり、何故に然るか。

(作文題案)

- (一) 志あるものの事竟に成る
- (二) 農業に従事する朋友に贈る書牘

仁慈

澤井智明の
何地の人なりや

何故に姓名
を語らざりしや

(例話) 澤井智明は京都の人なり、經學を好み書を能くす性質仁慈の心深く節儉を行ひ貧民を憐む、文化年中攝津河内の兩國洪水ありし時、金銀を投じて窮乏を救ひしこと夥しく、又毎歲極寒の頃及び夜、洛の内外を徘徊して米錢を貧者に施すこと多年なり、而して曾姓名を匿し人語りしことなし、然るも遂に公廳の聞く所となり、褒詞及び褒賞を賜りたり、後又三條より鴨川、車道より大津まで凡三里の間、夜燈を設けて旅客の往來に便じ、或自發企して義捐金を集め、車道に石を敷き二年にして成功せり、此の時官復賜ふ褒賞を以ちてせらる、都べて智明の

近傍に家するものの、皆其の恩を蒙らざるものばかりき、若他家の頽廢に及ばんとするを見きば、之を歎き、自其の家より就きて周旋し再興せしめけきば、官より賞賜を蒙りしこと數回に及べりと云ふ。

(格言) 人の危難を救ひ、人の空乏を周くして、言ふ形さざる之を陰徳といふ。(多識編)

(教授要旨)

- (一) 人の慈悲を以ちて心と爲し、他人の不幸を救恤すべきこと。
- (二) 慈悲憐恤の人の美德にして、人間處世の一大義務たること。
- (三) 慈悲救恤を施すも、自衛ひて其の名を售らんことを爲すべからざること。
- (四) 自其の慈悲の名を售るの折角の美德も美德たらざること。

(教授方法)

獨自安樂にして他人の不幸災厄を顧みざるの禽獸にも劣りたる行爲なれば、同胞相憐の情誼を以ちて、天災地變は固より他人の困難を感ずる事、苟力の及ぶだけ資産の相應せる限り、務めて之を救済賑恤し、而して又其の救済賑恤を以ちて自矜り自售るべからざることを講話して、格言例話を説き終るべし。

(問詞)

- (一) 澤井智明の性質の如何。
- (二) 智明の冬夜毎に如何なる仁恤を爲ましや。
- (三) 智明旅客の往來に便せしことあり、如何なる事業ありしか。
- (四) 智明道路を改修して、賞賜を蒙りしことあり、如何なる事業にてありしや。
- (五) 智明他家の頽廢を見る時の、如何にせしや。

(應用問詞)

- (一) 子等玩具を買はん、とて金を持ち出づる途にて、貧人の食を乞ふもの

に遇はば、如何にするか。

(二) 子等下級の生徒にして、試験に及第せしも、家貧しく更に書冊を購ふこと能はずして、將に退校せんとするものある時、如何にするか。

(作文題案)

(一) 我が身つねりて人の痛さを知れ

(二) 水災につき義捐金を新聞社に贈る書牘

勉 職

(例話)

支那夏の禹王の父を鯀と曰ふ帝堯の時に當り洪水あり、山を懷ね陵を襲き、堯鯀をして水を治めしめし。九年よりて水息まず功成らざりしかば、是に於きて堯の人を求めて更に舜を得たり、舜登用せらるゝて天子の政を攝行し、巡狩して鯀の水を治むること無狀なるを視乃

何年よして洪水治らざりしか

禹の外に居ること何年なりしや

鯀を羽山に殛し、禹を擧げて鯀の業を續がしむ、禹命を奉じ諸侯百姓に命じ、人徒を興し以ちて土を傳ち、山を行きて木を表し、高山大川を定め、父鯀が功の成らずして誅を受けしことを傷み、乃身を勞し思を焦し外に居ること十三年、家門を過ぐれども敢入らず、陸行に車に乗り、水行に船に乗り、泥行に橈に乗り、山行に攀に乗り、九山を披き九澤を通じ、九河を決し、九州を定めて、各其の職を以ちて來貢せしむ、舜の禹に立圭を錫ひ以ちて成功を天下に告げしが、天下是に於きて太平治せり。

(格言) 勉勉事に従ひて、敢勞を告げず。(詩經)

(教授要旨)

(一) 其の官職に當れば、勉勉力を盡して、其の責任を全くすべきこと。

(二)官職の爲には身命を擲ちて従事し、如何なる辛苦を喫するも、上下の爲に利することあれば、敢勞苦を厭はざるべきこと。

(三)官職に居て其の責任を盡さざるは、曠位曠官の譏を免れざること。

(教授方法)

家國の爲に毫髮の利益あるを見れば、奔走盡力して之を企圖し、遂には身命をも賭するに至るは、臣民の分として當に爲すべき所なり、况や苟俸祿を受けて官職に在るものは、力の及ぶ限り服役従事して、其の職務を盡さざるべからざることを懇諭して、例話に説き及ぼし、平易に禹の鞠躬盡瘁せるの狀を述べて、格言に歸納すべし。

(問詞)

(一)舜の禹をして、水を治めしめし所以は、如何。

(二)禹は、如何にして、水を治めたりや。

(三)禹は、如何なる功績を奏せしや。

(應用問詞)

(一)官署に在りて、俄に大地震動し、家屋崩壊するか、若くは火を失し、家屋は既に烟を以ちて満たされ、速に出でざれば、其の身將に危からんとす、此の際に當り、子等は唯疾走して、家を出で去らんか、如何。

(書取題案)

(一) 匪□□ニ□ヒテ敢□ナ□ゲズ

(二) 禹は□□□し思○焦○□に□ること□□□

(三) □□□ヌ□りけり

(作文題案)

(一) 我が職分を盡すべし

(二) 學生の務

(三) 商賈の務

(四) 職務の爲に負傷せしを見舞ふ書牘

義 勇

源賴朝兵を
擧げて何地
に據りしや

祐清の如何
に對へしと
思ふや

賴朝は是に
於きて如何
にせしと思
ふか

(例話)

伊東祐清の父を祐親と云ふ、平氏譜代の士にて世々伊豆に住せり、源賴朝平氏の爲に流されて、其の國に在りける時、祐親之を害せんとせしに、祐清私に其の謀を告げて避けしめたり、後賴朝兵を擧げて鎌倉に據り、坂東の將士悉屬するに及び、祐親を虜にして至るものあり、祐親耻ぢて自殺せり、賴朝祐清を召して謂ひて曰、汝が父の罪あるも、吾猶之を宥さんとせり、況や汝の吾に恩あるをや、汝吾に屬せよと、祐清辭して曰、吾の罪人の子なきは死の固より、其の分なり、吾が嚮に志を君に通せしも、他日の報を望まんとにあらす、さきは今將何の面目ありて君に事へん、唯速に死を賜へよと、然きとも、賴朝猶之を殺すに忍びず、祐清乃曰、君若吾を殺さず、吾必平氏の爲に君を

射ん、賴朝曰、一人の去就何にぞ勝敗の數に與らん、平氏に従ふこと、の意に任せよと、放ち遣りければ、祐清京師に往きて平惟盛に従ひ、源義仲を越前の國に拒ぎて遂に篠原に戦死せり。

(格言) 富貴も淫するふと能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈するこゝ能はず、これ之を大丈夫と謂ふ。(孟子)

(教授要旨)

- (一) 人の義に據りて事を行ひ、勇を以ちて事を成すべきこと。
- (二) 義のある所の奮ひて之に赴き、苟一身の利害安危を見て、進退をべからざることを。

(教授方法)

例話を説述して、古人の爲すべからざるを知るも、猶爲さんとするの義

烈、勇氣凜然たることを解明し、然る後格言の意義を講説して、十分了悟せしむべし。

(問詞)

- (一) 祐清の、頼朝は如何なる恩恵を興へしや。
- (二) 祐清の父の、如何にして死せしや。
- (三) 頼朝の、祐清に如何なることを言ひたりや。
- (四) 祐清の、頼朝の言に對して、如何なる答を爲ししか。
- (五) 祐清の遂に如何せしぞ。

(應用問詞)

- (一) 祐清の、平氏の危きを知りつゝ、何故に頼朝の言に従ひ源氏に属せざりしぞ。
- (二) 義といひ、如何なることを謂ふや。

(書取題案)

- (一) □□モ淫スルコト□ハズ□□モ□スコト□ハズ□□モ□スルコト

□ハズコレ□チ□□□ト□フ

左の句を口誦して、書取らしむべし。

- (二) 父己に害に遇ひたまへば吾何の面目ありて君に事へんや。
- (三) 一人の去就何にぞ勝敗の數に與らんやとて遂に放ちやりけり。

(作文題案)

- (一) 男子は眞の勇氣なかるべからず。
- (二) 勇氣と怯懦。

改過

(例話) 支那宋の代に施相之、施詡之の兄弟あり、家を分ちて住居せしが、共に田地の境界を爭ひ遂に不和と爲り、親戚朋友、數之が媾和を謀まざるも、其の紛争を解くを能はざりけり、同村に嚴鳳と云ふ人あり、孝友を以ちて聞え、其の

嚴鳳の孝友の狀を語れ

嚴鳳の何故
我が兄を
訾るが如き
言を爲さし
や

兄に事ふるを父に事ふるが如く、愛敬の誠、至らざる所なかりしが、或る時、施詡之事を以ちて船に乗り、他郷に赴かんとして、端かく嚴鳳と船中に相會し、雑話の末、家産の事に及びけきば、施詡之の彼の境界の事を談じ、頻に兄を非難せしめ、嚴鳳熟之を聞き、眉を攢めて曰、君の兄の膽略才幹ある人なり、然るに我が兄は無氣力にして、常に我等にのみ家産を委し、己毫も關せず、故に我が家に財物は幾何ありや、又田地の幾町ありや、嘗之を知らず、若我が兄にて、君の兄の如く才幹あらしめば、假令我等の田地を悉奪はるゝも、憾みなしと、施詡之其の言に感じ、覺えず涙を流し、深く既往の非を悟り、坐に悔悟の念、堪へず、俄に他行を止め、嚴鳳を請ひ、伴ひて兄の家に赴き、泣くく事の委

曲を語りて、深く自悔いたる旨を述べ、罪を謝したるに、兄も亦大に感じ、遂に互に嚮きの相争ひし田地を譲りて、兄弟最睦しくせりと云ふ。

(格言) 人誰か過ちなからん、過ちて能く改むれば、善これより大なるはなし。(左傳)

(教授要旨)

- (一) 人自其の過ちたりしことを知れば、直に之を改むべきこと。
- (二) 一旦過つとも、直に之を改むる時、其の罪惡消滅して、日に善良に進むべきこと。
- (三) 自其の過ちを知るも、之を改めざる時、日は惡事積累して、遂に大惡人と爲るべきこと。

(問詞)

- (一) 施相之兄弟の、何故に相争ひたるか。

- (二) 施詔之、如何なる處にて嚴鳳と相會せしや。
- (三) 嚴鳳の施詔之の兄を、非難せるを聴き、如何なる答をなししか。
- (四) 施詔之、嚴鳳の言を聞き、如何にせしか。

〔教授方法〕

古も、たゞひもあらじ、わがやせに、

枝をつらぬるかしのぎのかげ。

之等の歌意により兄弟相互に親和すべきことより、本題に掲ぐる改過遷善の美德なることを懇諭訓育せし。

〔應用問詞〕

- (一) 兄弟に叱責せられず、兄弟は如何にすべきや。
- (二) 汝等仲悪しき兄弟を見、如何に感ずるぞ。
- (三) 兄弟仲よく遊ぶと、他人と遊ぶと、孰れか樂しと思ふか。

〔書取題案〕

- (一) □□カ□ナナカラノ過○○□ク□ムレバ□コレヨリ□ナルハナシ

〔作文題案〕

- (一) 過を改むるに憚ること勿れ

習慣

〔例話〕

岩間大藏の、人と爲り軀幹長大なり、初め伶人たりしが、武田信玄之を擢で、士伍に列せしめたり、然るゝ大藏、性質怯懦にして死を畏るゝこと殊に甚しく、戰陣に臨む毎に退けり、信玄曰、是尋常の法を以ちて馭すべからず、我聞く、西域崑崙山の鐵の化して金と爲ると、即人の性の怯懦なるも亦之を鑄冶するの如何にあるのみと、一日戰に臨み、俄に大藏を縛して竹牌の外に居き、敵に向ひ坐し、寸歩も動くこと能はざらしめしが、矢丸雨の如く下り礮

大藏の性質は如何

信玄の何故に大藏を斯に危険の地に置きしか

聲雷の如く轟きて、大藏は膽落ち神死し生ける色なかりしも、幸い中らずして戦を竟るまで恙なきことを得たり、大藏是に於きて大い改悟して曰、人苟命あらば矢丸も中ること能はず、死、豈に畏るゝは足らんやと、こきより戦ふ毎に勇を奮ひて先登し、遂に驍名を得たりと云ふ。

(格言) 人性水の如し、曲直方圓、寓する所は随ひ、善惡邪正、習ふ所は随ふ。(李邦献)

(教授要旨)

(一) 人の性、本善なりと雖亦よく移動し易きものなり、假令水の如く白系の如し、其の容るゝ所の器に随ひ、其の形を變じ、其の染むる所に因りて其の色を易ふ、故に人の習ひ慣ることを、慎まざるべからざることを。

(二) 人の性質變動し易きこと、此の如しと雖、善行にの移り難く、動もすれ

ば惡徳に傾かんとするものなり、故に人の務めて已む克ち物欲を去り、以ちて善習慣を爲さるべからざることを。

(三) 然り而して其の習慣たるや、尤幼稚の時を恐るべしと爲す、幼稚の時に當りて一たび惡習慣に侵染せば、知らず識らず第二の天性と爲りたり、一旦之を悔悟改良せんと欲するも能はざるに至る、故に又其の幼年の時を慎むべきことを。

(問詞)

- (一) 岩間大藏の性質如何なりしや。
- (二) 武田信玄の如何して大藏の性を矯正せしか。
- (三) 大藏の如何に感じ、遂に如何なる人となりしぞ。

(應用問詞)

- (一) 人の性質の如何なるものなるか。
- (二) 人の尤恐るべきものの何なりや。
- (三) 何故に習慣の尤恐れ慎むべきものなるか。

(書取題案)

(一) □□□□ノ□□□□□□□□スル所ニ□□ヒ□□□□□□フ所ニ□□フ

(作文題案)

(一) 朱に交れば赤くなる

貞淑

(例話)

冬^{ふゆ}日^ひ茄子^{なす}あ
るべからざ
ればいとし
し^い如何^{いか}に
や

いと、若狹の國三方郡早瀬浦佐左衛門の妻なり、
孝心深くして善く舅姑に事へしが、姑は先づ死し、舅年八
十餘まで老耄し、非理なることを言ひ罵きども、いと、少
しも之に逆ふことなくして給仕せり、或る歳深雪軒を没
するの候に當り、舅茄子の羹を食ひんと云ひしに、いと之
を諾し、近隣の寺に至り、茄子の糠漬を乞ひ、水に漬し塩を
去り羹と爲して進めたり、又或る時舅鮮魚を欲す、時嚴寒

いと如何
に魚を思
ふや

にして海暴れ漁獵なければ、如何にせんと思を焦せども、
快く之を諾し、門に出で思ひ煩ふ折節、忽足許に魚躍りた
るを以ちて、いと天を拜して大に喜び、即調理して進めけ
り、隣人之を見るに、鳶の魚を攫み來りて、其の家の屋上に
止りしが魚を落して飛び去りたりとぞ、是誠にいとの
孝心鬼神に通じけるなるべし、其の行遂に國主に達し、國
主米若干を賜ひ、且租税をも免じたり。

(格言)

婦の舅姑に事ふるは、子の父母に事ふるに同
じ。(證・記)

(教授要旨)

- (一) 婦女の従順貞淑を以ちて、其の美德とすること。
- (二) 婦女の一旦嫁して他より之の時、其の舅姑を以ちて己の父母と爲し、

之に奉事すること、眞の父母に異らざるべきこと。

(三) 舅姑年老いて、益心を盡して厚く之に奉承し、怒罵憎怨を受くることあるも、決して抗拒反言すべからざること。

(教授方法)

歸納的に教授すべし。

(問詞)

- (一) いとし、舅の冬日、茄子の羹を望みし時に、如何して之を進めたりや。
- (二) 又舅の嚴冬中、鮮魚を求めし時、如何にしたるか。
- (三) いとし、國主より如何なる賞與を蒙りしや。

(應用問詞)

- (一) 舅姑が、夜俄に發病するとき、如何すべきや。
- (二) 實父母と義理ある父母と、奉仕を異にして、可なるべきや。

(書取題案)

- (一) □ノ舅姑○□フルハ□ノ□□ニ□フルニ□ヲ

(作文題案)

- (一) 婦の舅姑に事ふる心得
- (二) 女子の徳
- (三) 舅の旅先へ用件を送る書牘
- (四) 姑の無事なることを夫に報知する書牘

孝行

鹽谷岩陰の
兒たりしと
きい如何

(例話) 鹽谷岩陰は江戸の儒者あり、名ハ世弘、字ハ毅候、岩陰ハ其の號なり、甲藏と稱す、兒たる時嬉戯するに常ハ軍容を装ひ、磨を執りて床に踞す、群童俯伏して敢譁がず、父之を奇とし、自句讀を授くるに、朗々口ハ上る、稍長じて四書五經を誦し、出で、外師に就き、嶄然頭角を見す、十六歳ハして昌平學校に入り、二十一歳にして關西ハ遊び、千里

松崎慊堂の
岩陰を如何
よせしぞ

阿片の乱あ
りし何れあ
の國か

單行し文章囊は滿てり、歸りて父に呈すまは、父悦びて曰、
兒能く吾が志を成せり、吾憾みなしと既にして父死す、乃
帷を下し教授し以ちて母を養ふ、定省備に至る、然きども
家道窮縮し甘旨を具ふること能はず、松崎慊堂深く其の
窮を愍み爲めに其の藩主濱松侯に説く、乃擢んで文學
と爲し十五口糧を賜ふ、適侯首相と爲り精を勵し職を勤
めて弊政を改革せり、岩陰顧問に備り知りて言ひざるは
なく、言ひて盡くさざるをなし、侯退老するに及びて、嗣君
幼冲にして岩陰を以ちて輔導と爲す、岩陰知遇に感じ啓
沃輔導鞠躬盡瘁す、積勞を以ちて俸を増し二百石に至り
國政を與り聞く、是より先清國に阿片の乱あり、岩陰之を
聞き惕然として起ちて曰、外國人の浸漸實に此に在りと、

岩陰の何と
答へしや

阿芙蓉遺聞を作り、籌海私議を著し、備に海防の事を論せ
り、後、墨利堅人來りて要請する所あり、廟議決せざりしが、
岩陰日夜憂念し殆寢食を廢し、數書を作りて當路に上る、
是の時に當り慷慨事を論するもの往々禍害を獲、因りて
或る人岩陰の爲に危ふみ、之を微諷す、岩陰奮然として曰、
吾國家の爲に心を盡すのみ、禍害の顧みる所はあらずと、
幕府徵命あり、初めて將軍家茂公に見え、尋ぎて儒官と爲
り、二百苞を賜ひ、別に十五口俸を給せらる、岩陰、文學を以
ちて家を興すと雖儒を以ちて稱することを喜はず、槍技
及兵法を人より受け、覃思研精して頗蘊奧を極めたり、最文
章を以ちて名あり、一篇出づる毎に、人争ひて之を傳誦し、
天下の士識ると識らざると、皆之を稱して日本の歐陽修

と爲せりと云ふ。

(格言) 身を立て道を行ひ、名を後世に揚げて父母を

顯すハ、孝の終なり。(孝經)

(教授要旨)

- (一) 子たるもの、唯父母を愛敬するのみを以ちて、孝と爲さずして、大名を天下に揚げ、父母の名を顯すハ、孝の尤大なるものたること。
- (二) 艱難辛苦を嘗め、才學を研修し、伎藝に練達し、父祖の志を續ぎ、祖父の業を成し、以ちて名を揚げ、父母を顯すべきこと。

(教授方法)

孝に大小あり、愛敬ハ孝の小なるものなれば、小より進みて大あるものに至るべきことを説述し、例話を平易簡明に談じ、然る後格言の意義を講解了悟せしむべし。

(問詞)

- (一) 岩陰先生の讀書を始めしハ、如何なる事に因りてなりしや。
- (二) 先生の漫遊して歸りし時、文章を父に呈せしを、父ハ何と言ひしぞ。
- (三) 先生濱松藩に仕へて、如何なる功績ありしや。
- (四) 先生の海防の事を論せしハ、何故ぞ。
- (五) 先生の尤國事に力を盡せしハ、如何ある時なりしや。
- (六) 先生の遂ハ如何に昇進せしや。
- (七) 先生の尤名を得しものハ、如何。

(書取題案)

(一) □ナ□テ□ナ□ヒ□ナ□□ニ□ゲ□□ナ顯○○□ノ□ナリ

(作文題案)

(一) 父母の恩

慈育 父母 山岳 河海 洪恩 孝養 天地間 貴賤

(二) 父母の安否を訪ふ書牘

前略 御免 日夜 勉學 御左右 如何 御安否 御健勝 謹言

沈 勇

馬謖の爲に
一軍敗れ
しが諸葛
孔明に思
はれど
置せんと
ふや

(例話) 支那蜀漢の諸葛孔明、丞相を以ちて大軍を率ゐて魏を伐ち、參軍馬謖をして諸軍を督して前にあらため、魏の將張郃と戦ひしに、謖、亮の節度お違ひ舉動宜しきを失ひ大に郃に敗らるたり、初め亮、謖の才術人より過ぎたるを以ちて深く異器と爲し、引きて參軍と爲し與に談論する毎に晝より夜に達せしが、是に至り捕へて之を斬り、而して自臨みて祭り之が爲に涙を流し、其の遺孤を撫す恩平生の若し、亮の丞相たる、百姓を撫し、儀軌を示し、誠心を聞き、公道を布き、忠を盡し、時より益するもの、讎と雖必賞し、法を犯し怠慢なるもの、親と雖必罰し、善の微として賞

何故に怨む
ものなかし
や

せざるかく、惡の織として貶せざるなら、終に邦域の内に於きて威畏きて之を愛し、刑峻なりと雖、怨むものなり、其の心を用ふることを平にして、勸戒明なるを以ちてなり。

(格言) 剛毅の人、能く私愛を以ちて、正理を失はず。(評)

(教授要旨)

- (一) 凡事物を處理するもの、正理公道を據りて行ひ偏私を涉り理義を失ふべからざることを。
- (二) 荷義理を據りて事を爲さんと欲せば、剛勇沈毅の氣象あかるべからざることを。
- (三) 柔弱怯懦のもの、常に大事を當りて躊躇し、動もすれば愛憎の爲に公道正理を曲げ遂に事を敗ること。

(教授方法)

發強剛毅の人にあらざれば、確然たる操守なきを以ちて、常に義勇の心

を練り、剛毅の膽を鍛ひ、事に臨みて濶然大道を步履すべきことを講述し、格言より例話も及ぶべし。

(問詞)

- (一) 馬謖は、平素諸葛亮は如何なる待遇を受け居りしや。
- (二) 謖は、何故に諸葛亮に斬られしか。
- (三) 諸葛亮の馬謖を斬りし時の景況は、如何。
- (四) 諸葛亮は、如何なる人にてありしぞ。

(應用問詞)

(一) 剛毅○○○○□□□□ナ以テ□□□□ナ□□ハズ

(作文題案)

(一) 人の剛毅の氣象あかるべからず

剛毅 貧苦 艱難 進歩 妨害 増進 如何 極貧 極富 至
 賤 至貴 踰越 忍耐 勞苦 退屈 亨通 非常 才能 發達
 處理 善良 補助

勤 勉

(例話)

清兵衛は常陸の國那珂郡上小瀬村の農夫なり、此の地は甚しき瘠地に於て住居するもの僅に三四軒に過ぎざりしが、夫さへ次第に他村に移りて人の雇となりしかども、清兵衛は更に屈せず、妻子を率ゐて耕作に力を盡し、其の間に紙を漉きて晝夜怠らざりしかば、漸富有になり、遂に曩に破産せし二人にも合力して其の家を歸らしめしに、二人も亦程なく生活に事缺かぬ程になりたり、又五六町隔りたる處に七之介と云ふものあり、鹿猪の爲に屢田畑を荒さしを助勢し、又近村なる野澤のもの共を勵して、荒地を拓き農事に力を盡したるに、其の近傍

那珂郡上小瀬村の地味如何

那珂郡上小瀬村の地味如何なる地味

は悉肥沃の地となりたり。

(格言) 富貴ハ、天の與ふるところにあらず、人の勤め
行ふところなり。(大内正恒)

(教授要旨)

- (一) 人の富貴貧賤の別るゝ所以ハ、一ハ其の人の勉むると否とに在ること。
- (二) 勤勉の人の遂ハ富貴を得、怠惰の輩ハ恒に貧賤を免れざれば、徒に他人の富貴を羨まんよりハ、己先勤勉すべきこと。
- (三) 故に少壯の時に當り艱難ヲ耐へ忍び、辛苦を甘じ嘗むれば成長の後ハ、安樂ハ世を渡ることを得べきこと。

(教授方法)

先例話を以ちて、清兵衛が辛苦の結果ハ家計富裕と爲り、瘠地も膏腴と爲りしことを切實ハ説き去り、次ハ格言ハ及びて、人生勤勉の一日も忽

にそべからざるを講じ述べ、倦怠惰の人の老後辛酸を喫し、悲境に沈淪せし事實をも、參證とべし。

(問 詞)

- (一) 清兵衛の居住せし村の有様ハ、如何なりしや。
- (二) 清兵衛の富裕になりし所以ハ、如何。
- (三) 清兵衛の延きて他人に及ぼせし功績ハ、如何。

(應用問詞)

- (一) 道近しと雖行かざれば至らず、事小なりと雖爲さざればならずとは如何なる意義ぞ。
- (二) 勤勉の人は萬物を化して黄金とあすの術あり、光陰と雖亦之を黄金に化せどは如何なることをいひしものか。

(書取題案)

- (一) 格言を口誦して書取らしむべし。

(作文題案)

(一)勤勉

賢愚 賢智 愚不肖 古今 幸福 寸陰 刻苦 立志 勞逸
生涯

(二)勉強の幸福を生む母なり

貴賤 貧富 職事 一己 幸福 一國 上進・文藝 百工 勉
勵 分明 明瞭 野蠻 文明 智識 琢磨 勞思 日夜 功績

研究

(三)人の怠惰を戒むる書牘

(四)實業家列傳を贈る書牘(朋友又ハ)

攝生

(例話)

何故ハ快樂
の日少かり
しや

ロイス、コルナロは、伊太利國ウエニスの貴族にして、放蕩の朋友と交り四十歳に至るまで、過飲飽食を爲に常に多病にして、快樂の日少かりしが、醫師の諫に従ひて

全治の速か
りし理由ハ
如何

惡習を一變じ、嚴に飲食を節したるを、其の効驗著しく一年を出でずして、疾病悉治し健康の人と爲り、是に於きて益適度を守り、一日は實物十二チャンス、淡薄の酒十四チャンスを用ひて定量とせり、此の量は稍少きに過ぎて恐くは尋常の人に適せざるべしと雖、コルナロは之に依りて強健長壽を樂めり、七十歳の時誤りて高處より墜ち手足を打撲せしが、老年にて且大傷なれば、尋常の人よりありては必不具の廢物となり、或死に至るべきも、コルナロは日ならずして全治し故に復したり、八十三歳に及びて尙獨山に登り馬に乗り、神氣活潑にして小説を書き、間兒輩と共に馳せ奔り戯を遊び、九十八歳に至りて安靜に死せり。

(格言) 所好を以ちて身を害ふこと勿れ、嗜欲を以ち

て生を妨ぐることを勿れ。(説苑)

(教授要旨)

- (一) 無病健全の人生最大の幸福なれば常々病を病なきの日に慎み、身体
の攝生を行ふべきこと。
- (二) 無病健全の事業を成すの基本なれば務めて一身の私慾を節制し、疾
病を醸さるるに注意すべきこと。
- (三) 病の多く過飽暴飲に起因するものなれば常に飲食に注意し、過度に
至らざるやう務むべきこと。

(教授方法)

僅に飲食の私慾を以ちて、貴重なる身命を毀損するは、實に愚の至りあ
れば、務めて私慾に克ち去り、身体をして健康長壽にして、種々の難難辛
苦に耐へ、其の目的の事業を成し遂ぐる様、平素攝生をべきことを懇説
し、例話格言に及び、攝生の一日も等閑と附とべからざることを感了せ
しむべし。

(問詞)

- (一) コルナロは、最初何故に多病なりしか。
- (二) 其の疾病悉治し健康の人と爲りしは、何に因れるか。
- (三) コルナロの日々用ふる食物の量、如何。
- (四) コルナロ、高所より墜ち大傷せし時、其の全治の速なりしは、何故ぞ。
- (五) コルナロ、八十三歳の時の有様は、如何。
- (六) コルナロは、何歳の天壽を保ち得たりや。

(應用問詞)

- (一) 無病健全なるは、何故に人生の最大幸福なりと謂ふや。
- (二) 飲食を節するとは、如何とべきや。
- (三) 病は口より入るとは如何なる義理か。

(書取題案)

左の歌を口誦して書取らしめ、且其の意義をも説話せしむべし。
痛き針苦き藥に、あつき灸

くるしまんより、かねてつゝしめ。

(作文題案)

- (一) 活潑の精神は健康の体によさる
- (二) 衛生會に入會を勧むる書牘

節 儉

(例話)

土井利勝は徳川幕府の大老職なり、嘗漢絲一尺餘なるを拾ひ取り、近臣大野仁兵衛に授けて曰、汝謹みて之を藏めよと、或る人其の鄙吝を笑へども、利勝置きて問ひさりしが、後三年を経て利勝刀の下け緒の端釋けたきは、仁兵衛を召して嚮きの漢絲を求めたり、仁兵衛直之を腰袋に取り以ちて進めけき、利勝手づから其の絲を以ちて下け緒の端を結び、微笑して曰、無用の用、今にして驗

利勝の僅なる一尺餘の漢絲を何故に斯く扱ふに思ふや

仁兵衛の謹んずる所を如何なるか

ありと、遂に其の家宰寺田某を召し謂ひて曰、吾甚仁兵衛の謹愼にして命を重ずることを嘉みせり、宜しく祿三百石を増し與ふべし、夫漢絲の物たる、彼の國の桑婦辛苦の餘に成りて、展轉運送し、太平洋の渺茫たるを歴、而して後始めて我が地に入る、其の人力を経ること幾何ぞや、尺寸と雖之を棄つるは天物を暴殄するなり、吾常之を懼る、今仁兵衛乃能く此くの若し、善く天に事ふるものと謂ふべし、輒戯れて曰、一尺の絲にて三百石の祿を取りしは、獲る所も亦多からずやと。

(格言)

一粥一飯も當に來處の易からざることを思ふべし、半紙半縷も恒は物力の維ぎ難きを念ひ、宜しく未雨降らざるに綢繆すべし。(楮園)

(教授要旨)

- (一) 節儉の、一身一家を、經理するに肝要あること。
- (二) 微物と雖、各用ふる所あれば、漫りに之を放棄せずして、其の用を爲さしむべきこと。
- (三) 微物を放擲するは、是天物を暴殄するものとして、遂に身を亡し家を滅すに至るべきこと。

(教授方法)

節儉の以ちて身を保ち家を興その基礎たることより、例話に説き及ばし緊要の處に至る毎に問答を爲し、然る後格言に入りて一小微物も皆辛苦艱難の後に成就せるものなれば、決して漫然之を取扱ふべからざることを講述し、又節儉と吝嗇との區別をも説明すべし。

(問詞)

- (一) 土井利勝の、唐絲の一尺餘なるを拾ひ取りて、如何にせられしや。
- (二) 仁兵衛の、其の唐絲を如何にせしぞ。

- (三) 利勝の大野仁兵衛を賞するに、三百名を以てせられし所以の、如何。
- (四) 利勝の僅少なる唐絲を、鄭重に取扱はれし何故ぞ。

(應用問詞)

- (一) 或る人常に些少なる金錢物品をも愛惜しつゝ、貧民を救恤し、公益を企圖する事に、更に惜む色なく金錢を出して之を爲せり、子等此の人の行を如何に思ふか。
- (二) 子等の如く、現に父兄の干涉保護を受くる身にありての節儉といふ、如何にすべきや。
- (三) 災も三年置けば用をあすといふ如何なる意味の諺か。

惜陰

(例話)

中西維寧は淡淵と號す三河の人なり、尾張の竹腰氏より仕ふ、幼よりして學を好み、常に暗室に坐し、白晝と雖戸

中西維寧の
何れの人なりや

を閉ぢ、僅に漏光の照して書を読み、夜の燈下に對し毎に雞鳴に至る、机に憑りて坐睡し寢し就くとなし、一師に逢へば必従ひて道を問ひ、一書を得れば必手寫す、年壯あるに及びて、弟子日に進み門に遊ぶもの數百人、後竹腰氏に従ひ江戸に赴き博く四方の士に教授す、竹腰氏事は則就きて諮問し、議政の事にあらざれば敢召さず、召せば必駕を以ちてす、維寧性敦厚沈黙、人と競はず、交遊極めて寡し、常に名節を以ちて人を勵す、偏に文藝のみを以ちて後進を鼓動するものと異れり、其の病篤さに至り尙講を輟めず、將に死せんとするを知り、筆する所の著書は悉之を焼かしめて曰、未定の書恐くは後世を誤らんと。

(格言) 青年重ねて來らず、一日再晨なり難し、時に及

竹腰氏は何
故に斯く節
重に維寧を
取扱はれし
と思ふや

びて當に勉勵すべし、歲月は人を待たず。(附傳)

(教授要旨)

- (一) 歲月の發々馳せ過ぎて知らず識らずの間、老衰の齡に至るものなれば常に時日を愛惜し、業務に勤勉すべきこと。
- (二) 青年の時に當り、勉強して業務を爲し置かざれば、必老衰の後に至り、後悔を生じて悲歎すべきこと。

(教授方法)

勤勉の人の光陰を化して黄金と爲すの旨意を以ちて、例話を述べ、格言を講じて、光陰の貴重にして空過すべからざる感念思想を喚起せしめし。

(問詞)

- (一) 中西維寧の如何ある勉強を爲せしや。
- (二) 竹腰氏の如何に維寧を待遇せられしや。
- (三) 維寧の如何なる性質の人ありしか。
- (四) 維寧病篤き時、如何にせしか。

(應用問詞)

- (一) 光陰は吾が産業なり、との意味を話せ。
(二) 昨日まで、空に燕の、あるはなく、

なきは数えふ、初雁の聲。

右の歌意を問ふ。

- (三) 登蓮法師のことを、はなせ。

- (四) あすありと思ふは人の、あだざくら、

夜はあらしの、吹かぬものかは、

右の歌を意解せよ。

(書取題案)

- (一) □□□チテ□ラズ□□□□ナリ難シ□ニ□ビテ當ニ□□スベシ□
□ハ□チ□ダズ

(作文題案)

- (一) 借陰

尺壁は寶にあらず 寸陰これ寶なり 管得庵といへる人 林羅
山に云へるやう 子の心に誠にしか求むるならば 何ぞ來年を
待たんやとて 除日より 講釋を始めたりしとぞ
(二) 登蓮法師のことを記せ
(三) 光陰の吾が産業なり

自助

(例話)

シエルウ井スは英吉利國の人なり、初め其の貧困
なりし時、誓ひて債を負はず、自語りて曰、我が家の資産は
小にして家累は多し、余が世務を營むに當りて父僅に二
十金を賜ひぬ、既に水師の一官を得て金を要することあ
り、困りて、受くる所の金を以ちて必用の品を買ひし其
の物品の用を爲さず、而して復一錢なり、是の時心に爲

何故他人
の金錢を借
りざるか

ジエルク
スは是に於
きて如何に
たる事を爲
かたりと思
ふ

ジエルク
スは遂に如
に進みしと
思へるや

らく、今より後、更に償ふべき金銭ある、あらざれば、復
必用の品と雖買はずと、因りて自抑損し、食時に軍官と卓
を同トくせず、獨澹素を食ひて飢に充て、瀚濯補綴の衣を
服し、或臥牀被を以ちて袴を製せり、此くの如くにして金
錢を貯へ、必用の物品を買ひて吾が面目を存し、終始心を
用ひ我が資産を以ちて我が生計を營み、今日に至れりと、
ジエルクスの窮陋に居ること凡六年にして善く自檢
繩し、品行端正にして人の標準と爲る、足きり、遂に大將
に進み佛蘭西、西班牙と戦ひて大捷を得、奇勳を立てたり。
(格言) 若、事の成就せんことを望まば、自往きて之を
おすべし。(西語)

(教授要旨)

- (一) 事業を成就せしむるに、不撓不屈の氣象を以ちて、獨立自治の精神を
勵み決して他人の力に依頼すべからざることを。
- (二) 勤勉と儉約との、獨立自治の道にして、務めて此の二つを行ひ、自奮勵
檢束せば、其の目的の事業を成就し得べきこと。
- (三) 生を治むるに金銭を人に借るに、即ち他人の力に依頼して、獨立自治
の道にあらざれば、如何に貧困なりとも、自勞働して家産を造り出し、
不借の二字を恪守すべきこと。

(教授方法)

富貴榮華の己の手にて之を取り決して他人に依頼すべからず、徒に他
人の力を借らんとするものは、是耻なきものありとの意義を以ちて例
話を懇切平易に説き、格言に及びて反覆其の意を講述し、兒童をして會
心了悟せしむべし。

(問詞)

- (一) ジエルクスは、如何なることを、心に誓ひ居りしや。

- (二) ジエルウキスは幾何金を父より賜りて、家を立てんとせしや。
- (三) 其の二十金を如何にせしや。
- (四) ジエルウキスは二十金を悉消費せし時如何にせしや。
- (五) ジエルウキスの遂に富裕なりし所以は如何。
- (六) ジエルウキスは遂に如何なる地位に進み如何なる事業を爲ししか。

(應用問詞)

- (一) 或る兒童は平素不勉強にて試験毎に他人の答案を竊み見て筆記せり、子等は此の兒童を如何と思ふか。
- (二) 不借の二字は其の善きことを知るも家貧にして父母兄弟の病める時、或天災地變等にて不慮の災厄に逢遇せる時は如何にすべきや。

(書取題案)

(一) □□ノ□□センコトヲ□マバ□□キテ□チナスベシ

(作文題案)

(一) 自助

(二) 天の自助くるものを助く

(三) 依頼心の惡しきことを告ぐる書牘

(六) 獨立自主の精神を養成する術を問ふ書牘

友愛

安兵衛の何をなして生計を立てしや

(例話)

安兵衛は岩代の國會津東黒川村の農夫なり、家貧しくして耕作の暇に日傭を爲し、以ちて生計を立てしが、少頃より妻を娶らず、萬事母の指圖に任せて私にすることとなり、一日の傭錢僅に三四十文に過ぎざるを母に渡し置き、飯米、茶、塩、薪等調ふる時、之を母に告げて價を受取りて買ひ求め、總べて何事も母の意を受け、自專にせざることを此くの如し、安兵衛の兄は九右衛門と云ふもの

安兵衛の兄
に何と云ひ
しや

安兵衛は其
の衣服を如
か何にすべき

あり、痰を病みて妻をも他へ奉公せしめ、獨身にて殆飢ゑんとせしを、安兵衛よく之を養ひ、敬ひつかふること頗至りしが、母死して後、親の如く、萬事兄の指圖に違はず、常に兄に謂ひて曰、家貧なりと雖、心を勞すること勿れ、弟壯健にして操作せば、如何あもして兄を養はん、朝夕心を盡して養護せり、時、會凶年にして衣服を求むること能はざりし、漸之を買ひ調へ人、其の裁縫を頼みければ、其の人安兵衛に謂ひて曰、九右衛門の勞働せず、且常に火閣に憑りて衣裳も亦薄からず、子は衣薄くして寒風をも厭はず、勞働せるに因り、若病に冒されなば、子一人の不幸のみならず、九右衛門にも悲歎せしむべし、故に宜しく子の身体を煖にすべしと、安兵衛之を諾し、家歸りて兄

に新衣を着せしめ、自兄の破衣を取りて着せしとぞ、元祿九年の夏、會津侯米若干を賜ひ、以ちて其の行を賞せり。

(格言) 子弟ハ父兄の言に背くべからず、勞事は、自任

し、勞を父兄に分つべからず。(父兄訓)

(教授要旨)

- (一) 子弟たるものは、父兄を愛敬し、厚く心を盡して、之に事ふべきこと。
- (二) 父母は言ふに及ばず、兄弟は倫理の尤親きものあれば、相敬愛すべきこと。
- (三) 子弟たるものは、父兄の命令に違背すべからざるは、勿論、勞事は、自之を爲し、疾病は、厚く之を視、苟父兄の心を勞せしめざるべきこと。

(教授方法)

例話を簡明平易に説述し、背察の處に至る毎に問答を以ちて、友愛の情を惹起せしめ、格言に及びて敷衍講明するに、兄弟の天倫、上尤重すべく

尤相愛すべきことを以ちて十分觀念を開發し、然る後問詞或應用問詞に據りて其の思想の如何を試むべし。

(問詞)

- (一) 安兵衛の母に事へて孝なりし狀を語れ。
- (二) 安兵衛の兄、何故に弟の世話を受けしか。
- (三) 安兵衛、如何に兄を養護せしや。
- (四) 安兵衛の衣服を調へて兄に着せんとせし時、或る人の安兵衛に語りし辞、如何。
- (五) 安兵衛、遂に其の衣服を如何にしたるか。

(應用問詞)

- (一) 子等試験前後習に餘念なく勉強せる時に當り、父兄より用を命ぜらるれば、如何にするぞ。

友誼

(例話)

戴和の支那漢の世の人なり、能く交友を撰めり、其の益友を得る毎に香を焚きて先祖に告げ、其の姓名及人品を簡冊に書して之を金蘭簿と名けたり、其の意、蓋志操の堅き、金の如く、情味の香きは蘭の如き、取れるなり、又其の交を結ぶ時、盟ひて曰、他日、卿貴くして輿に乗り、吾賤しくして笠を戴く時、途に相逢、君は車上に揖せよ、他日君貧しくして歩行し、吾富みて馬に乗る時、途に相逢は、吾は馬より下るべしと、其の交遊常に誠敬を專にして、相變渝せざりと云ふ。

何故に斯く
やすると思ふ

(格言) 交親しければ、禮儀は、猶嚴なることを要せよ。

(箴思錄)

(教授要旨)

- (一) 朋友は常に禮儀を以ちて相交接し、侮慢の舉動あるべからざること。
- (二) 朋友の中、尤親密あるものの、亦尤褻慢に流るゝを以ちて、遂に爲に風波を生ずることあれば、愈親密なるに、隨ひ誠敬を加へ、禮儀を嚴にすべきこと。

(教授方法)

例話より格言に入り、良友の殊に親密にし、而して誠敬以ちて之と交り、禮儀以ちて之と接すれば、其の交りや久しくして、且己に利益する所あることを懇説せし。

(問詞)

- (一) 戴和の益友を得る毎に、如何せしや。
- (二) 戴和の人と交を結ぶ時に當り、如何なる語を以ちて盟約せしか。
- (三) 戴和の朋友と交遊するに、如何ありしか。

(應用問詞)

- (一) 己に若かざる朋友は、如何にすべきや。

- (二) 朋友より侮慢を加ふる時に如何。

(書取題案)

- (一) □□シケレバ□□ハ□□ナルコトナ□セヨ

(作文題案)

- (一) 友誼
- (二) 朋友と交る心得

尊王

藤田東湖の父は其の名を何と云ひしや

(例話) 藤田東湖は常陸の國水戸藩の人なり、名は彪、字は斌卿、虎之助と稱す、後、誠之進と改む、東湖は其の號なり、父を一正と曰ふ、水戸に仕へ、彰考館の總裁に任じ、祿二百石を食む、東湖人と爲り、穎異にして、人皆藤田氏子ありと稱す、東湖年甫めて七八歳の頃、父一正が晩酌の興に乗じ、毎

東湖は如何なることよ
り尊嚴を復せんと奮起せしや

東湖の没せし時朝野の様は如何

に文天祥の正氣の歌を吟せるを聴き、遂に之を暗誦し、後又其の字義の理解を尋ね、心竊に以爲らく、我も亦天祥の如き忠臣たるべし、我嘗父の人に語るを聞くに、父は毎に慷慨として曰、今や天子は萬乗の君と稱すと雖、唯其の名のみにて其の實なく、動もすきは、幕府の制肘する所と爲らせ給ふと、嗚呼實に歎くも餘りある事あり、我奮ひて忠を盡し力を效して朝廷の尊嚴を復せんと、是より志を勵し入りては則書を讀み學を講じ、出でゝは則槍を弄し劍を撃ち、一日も其の業を廢せず、是の時に當りて屢邊海の警あり、東湖、其の君齊昭卿と大に計畫し防禦の政を議せしが、事京師に傳聞し、天皇大に齊昭卿の意を邊備に留むるを嘉し給ふ、因りて東湖の名も亦叡聞に達せり、東湖の歿

するや、計音京師に至り、天皇頗震悼し給ひ人を失ふの嘆あさせ給ひしと云ふ、天下の人、知ると知らざると、皆之を惜まざるものなかりき。

(格言) 築波根の、このもかのもとに、かげはあれど、君が
みかげに、ますかげはなし。(舎歌)

(教授要旨)

- (一) 我が皇上は、實に一天萬乘の大君として無上無比の尊榮を保ち給ふこと。
- (二) 此の尊榮は三千年の古より、以ちて現今の聖上に傳承し、尙億萬年無疆の久しきに涉りて、一定不變たること。
- (三) 我々臣民は我々の祖先と共に、此の尊榮光輝ある、有り難き大君の下に覆育せられたれば、我々臣民は此の鴻恩に報い奉らざるべからざる。

(四) 此の鴻思は報ゆるの道に、念々皇室を忘るゝことなく、忠義の心を磨き、平時にありては國民民福を増進することを圖り、若一旦事變に逢遭することあらば一身を皇室に捧げて、皇室の藩屏干城たるべきこと。

(問詞)

(一) 東湖先生の忠臣たらんどの志を起されしに、如何なる事と因りてなりしや。

(二) 東湖先生の遂に其の志の如くなりしか。

(書取題案)

(一) □□□□ノモカノモニ○○○○○○

□ガ○○○○マスカゲハナシ

(作文題案)

(一) 藤田東湖の尊王

(二) 國民の盡すべき事柄

(三) 招魂社に参詣するを誘ふ書牘

敬長

(例話)

利右衛門の参河の國北野村の農夫なり、父は早く死して唯母のみなりしが、利右衛門、姉と共に之を養ひ、頗る孝を盡し、姉弟の二人は常に菽麥を食へども、母に甘旨を具へ、而して其の食を進むる時も、案を捧げて目より高く、禮敬を極めしかば、幼童も之を見習ひて、母の箸を取らざる時の先たちて食せざりけり、又冬夏の更衣にも母に着せしむるに、必新しき物を以ちてし、己等も必故きを服し、冬日外より歸れば、母之を勞りて爐に倚らしむれども、壯者の體温ありとて火に近かず、然れども時より母

何故に目より高くするか

利右衛門の時
に如何なる
態を爲まし
と思ふや

姉は遂に如
何せしや

の意を慰めんと欲し、爐に近くことあるも跪坐して窓に
手足を展伸せず、其の敬愛總べて此くの如し、姉弟二人の
行の一家の模範と爲り、家内自和氣を生じ、其の輯睦なる
こと、他人と雖、闔内に入れ、身体に薰陶せるを覺えしと
云ふ、姉年長するに隨ひ、婚嫁を勸むるものありしが、姉心
に以爲らく、母の膝下を離れて他へ歸がんと、吾が欲せざ
る所なきとも、貧乏き家に久しく居るの弟の累たり、如何
に決せん、と左思右想せしに、利右衛門其の意を察し、若姉
にして嫁せしめざれば、是倫理を廢するなり、然るをも強
ひて之を勸め、其の意は背くも亦不可なりと、遂に之を姉
は語り、互に心緒を述べ合ひて嫁せず、而して母を看侍す
ること、決し、爾來益力を戮せ、孝養を盡し、且姉の常は弟

國城を拜し
又國城を趾
にせざる
に何故ぞ

の婦と親睦して、同母妹の如く、弟の子を愛撫して己の子
の如くしければ、家内愈協和せり、是より於きて利右衛門の
姉を戸内の主人と做して萬事を委任し、己の戸外の耕稼
をのみ勉めしに因り、家計稍裕に赴きて、凶年と雖、租税を
闕くをなかりき、利右衛門の斯く謹慎あるを以ちて、常に
朝へ出づるは國城を拜し、夕へ寝ぬるに國城を趾にせず、
差役はあへば人に先たちて赴き、常に藁索を貯へて以ち
て風水の變に備ふるなど、唯家事を營むのみならず、郷里
の爲にも心を用ひしを慨此くの如し、故に一村悉其の人
と爲りを敬慕して、慈父良師の如く之を待遇せり、因りて
領主より米三石銀四十兩を賜ひて褒賞し、爾後毎歳米二
石宛を給ひて孝養の資と爲さしめ、又銀四十兩を姉に賜

ひ殊は毎歳一口の廩米を與へ、其の行實を石に彫りて、里門に旌表せしめたり。

(格言) 凡卑幼の尊長は事ふる、當に忠誠恭遜を以ちて本とすべし、事大小さく必咨稟して乃行へ、專擅なるふこを許さず。(熊氏家規)

(教授要旨)

- (一) 卑賤幼稚のもの、尊富長老の人に從順して、之を尊敬すべきこと。
- (二) 卑幼のもの、事を爲し、物を處するに當り、必尊長の人を指揮を請ひ、其の命令に據りて忠實恭謹に處置すべきこと。
- (三) 卑幼のもの、尊長の人に諮稟せずして、擅に事を爲し、或尊長の旨を受けて之を爲すも、疎放に處置せる時、不敬不弟たるべきこと。

(問詞)

- (一) 利右衛門の母に膳を進むる時、如何せしや。

- (二) 利右衛門冬夏の更衣に、如何せしか。

- (三) 利右衛門、母の勸めを受けて、爐に倚る時、如何せしや。

- (四) 利右衛門の姉、何故に嫁せざりしぞ。

- (五) 利右衛門の國君に對する禮敬、如何よせしか。

- (六) 利右衛門姉弟二人、領主より如何なる殊賞を、賜りたるか。

(應用問詞)

- (一) 或る一事を行ふんと欲して、尊長に諮稟せしに、尊長の指揮命令する所、若理法に協ひざるこある時、如何。

(作文題案)

- (一) 長者に事ふる心得

交際

(例話)

山本北山は江戸の儒者なり、名は信有、字は天禮、北

北山^{ひやま}の如何^{いか}に君^{きみ}平^{へい}を待^{まち}遇^ぐした^{した}り^りと思^{おも}ふ^ふや

山は其の號なり、北山天性慷慨然諾を重じ死生を輕じて古の俠客の風あり、下野の人蒲生君平は、豪傑の士にして夙に勤王の志あり、四方に遊び上國より江戸に來りしに、窮すること甚しく知人を訪問すとも受くるものなく終に北山の許に詣り、北山の許一見するや、愁然として手づから數金を贈りけきは、君平駭き辭せしに、北山曰、足下遊學すること數年に及び、今將に郷に歸らんとして、衣敝れ囊罄くるの尊親を慰むる所以にあらずと、君平感涙を流し謝して之を受けたり。

(格言)

物を人に贈るには、薄くして誠あるを要す、物厚くして誠なきは、人に接するの道にあらず。(上杉治憲)

(教授要旨)

- (一) 人に交際するに、信實懇切を以ちて旨とすべきこと。
- (二) 人に物を與ふにも、信實懇切の心あれば、物薄く品少しと雖、人への甘受して其の恩に感ずべきこと。
- (三) 之に反して、信實懇切の心あければ、千金を人に贈るも、人快く之を受けずして、其の金に價值なきこと。

(教授方法)

交際の要道は、誠實親切を以ちて第一とし、之より次々に禮敬を失はざることを、事實と格言とにより、講説理會せしむ可し。

(問詞)

- (一) 北山先生の如何なる人ありしや。
- (二) 蒲生君平の、何故北山先生を訪ひたるか。
- (三) 北山先生の如何に君平を待遇せしぞ。
- (四) 君平の感涙を流せし所以の如何。

(應用問詞)

- (一) 自己と校を同じくせざる生徒が、學校よりの歸途に驟雨に遇ひ、傘なくして困却せるを見ば、子等如何にするか。
- (二) 其の生徒の家へ、自己の家より遠き時、是より復傘なきに苦むべし、如何せば可なるぞ。

(書取題案)

- (一) □チ□ニ□ルニハ□グシテ□アルチ□ス□□グシテ□ナキハ□ニ□スルノ□ニアラズ

(作文題案)

- (一) 交際の要道
- (二) 人と交る心得
- (三) 未面會せざる人に贈る書牘
- (四) 或る人に面會を請ふ書牘

謹 慎

芝任は誰に
就きて擊劍
を學びしや

此の時芝任
は如何に答
へしと思ふ

(例話)

芝任は、宮本武藏に就きて擊劍を學び、後某侯に仕へて、四百石を領せり。其の國の執事某、武藝を好み、己が家僕數十人を、して、其の門人と爲り、二刀の術を習はせむ。一日執事、芝任に謂ひて曰、足下劍術の鍛鍊あるを、言を俟たず、願はくは、其の奥伎を見るを得ん。芝任曰、吾が藝に、八人詰といふ事あり、尋常のもの、八人、八方より、吾を圍むも、容易に切り抜くる術なりと、執事之を聞き、乃ち壯士八人を出して曰、是皆足下の門弟なり、此等を敵手と爲し、以ちて其の伎を爲されよ。芝任莞爾として曰、弱輩、木刀風を見れば、皆逃れて乱れんと、壯士等大に怒りて曰、今日まで、師たれ

芝任は何故
かに逃亡せし

とも是より後の寇讎なり、僅の技藝を以ちて大國に來り
暴言を吐くは何れぞ唯撃ち殺すべしと、髭を撫で腕を扼
し争ひ進みたり、中に清水某なるものあり、九州無雙の大
力なりしが、竹刀を取りて庭上に躍り出で、七人の勇士之
に繼ぎ各木刀を提げて後に隨ひ、八方一齊に奮迅して之
を打ち、芝任は枇杷の木刀を以ちて之を拒ぎ、相闘ふこと
久しくして、清水、芝任を擲際し追ひ詰め、其の頭首より斜
に左の肩骨を打ち碎きければ、芝任は息絶えたり、凡一時
計りにして蘇り、後數日を経て遂に逃亡せしとぞ。

(格言) 勝つことばかり知りて、負くることを知らざ

れば、害其の身に至る。(徳川家康公)

(教授要旨)

(一) 己の所能ありとも、慎重これを藏し、漫り人々を指示すべからざるこ
と。

(二) 己の勢を恃みて人を凌ぎ、己の智を恃みて人を愚にするもの、遂に
禍敗其の身に至るべきこと。

(教授方法)

自慢の園子が棚より落つる等の俚諺より例話し説き及ぼし、然る後格
言の意義を講明して、自負の凶徳たることを感覺せしむべし。

(問詞)

(一) 芝任は如何なる人なりしや。

(二) 執事芝任の與伎を観ることを乞ひし時、芝任は如何に答へしや。

(三) 執事の八人の敵手を出せし時、芝任の言ひし辭は如何。

(四) 芝任、八人の敵手と闘ひし其の結果は如何なりしや。

(應用問詞)

(一) 自慢高慢馬鹿のうち、といへる諺を、芝任の事實に、ひきあて説話せよ。

(二) 自重と傲慢との區別を詳述せよ。

(書取題案)

(一) ロットバカリロリテロクルコトナラザレバロノロニロル

(作文題案)

(一) 謙遜

(二) 傲慢

(三) 我が弟の不遜なるを戒むる書牘

(四) 自慢高慢馬鹿のうちといへる諺の意義を問はれしに答ふる書牘

克己

(例話)

上田某の筑後の國久留米侯の臣なり、少壯の時、書を讀まざりしが老年に及びて大に之を悔い、是より日夜

學を勉めて少しも倦怠せざりき、一日知己の人より語りて曰、武人は死を致して勝を取るも猶且辭せず、今我を以ちて我に勝つに、何の難きことかあらんと。

(格言) 人は身を立てんと思ふには、苦しと思ふ事を務め成し、苦しと思ふ家に立ち入るべし、夫にて身は立つものなり。(精進漫筆)

(教授要旨)

(一) 事業を成就せんと欲せば、務めて辛艱を喫し、私慾に克ち去るにあらざれば、能はざること。

(二) 慾念に制せられて、克ち去ること能はざれば、遂に其の一身を誤り終生悲歎の境に沈淪すべきこと。

(教授方法)

克己の念慮弱きとき、私慾を恣にし、暴慢無禮を働き、己が身の害とな

ることを事實と格言とに照し、克く教授すべし。

(問詞)

- (一) 上田某ハ、少年の時如何なりしや。
- (二) 老年に及びて、如何せしか。
- (三) 知己の人に語りし辞ハ、如何。

(書取題案)

(一) □ハ□ナ□テント□フニハ□シト□フ□ナ□メ□シ苦○○思○○
○立○○□ルベシ□ニテ身○立○○○○○

(作文題案)

- (一) 克己
- (二) 私慾を制すべし

寛大

(例話)

加藤嘉明は豊臣氏の親臣にして、智勇兼ね備り屢軍功を積み、後四十餘萬石を食めり。嘉明士を待つと思あり一日客を饗する時、其愛藏せる饗製の盃十枚を出して具と爲せしに、侍臣誤りて其の一を毀ち自首して粗漏の罪を俟ち、心に以爲らく死を賜ふ。非されば必放逐せらるべしと、嘉明聞きて之を召し、毫も愠まる色なく徐に曰、吾何ぞ器物の故を以ちて士を罪せんやと、因りて餘の九盃を悉之を毀てり。侍臣益々悞る。嘉明日、吾怒りを此の器に洩すに非ず、此の器にして長く存在せば、睹る毎に一を缺くの歎あり、既に此の器を以ちて人の過を致せり、然るに此の器を藏めて其の名を後年に遺すハ、吾が屑とせざる所なきは、斯の如く本を絶ちて物を愛玩せし非を

嘉明ハ侍臣を如何に處置したりと思ふや
嘉明の九枚を毀ちし意如何

戒めたるなりと、是より終に器物を愛せざりしと云ふ。

(格言) 君子は、人の及ざる所を責めず、人の能くせざる所を強ひむ、人の好まざる所を苦めむ。(全通)

(教授要旨)

- (一) ひとに常に寛厚仁恕を以ちて心と爲し、漫りに喜怒すべからざること。
- (二) 他人を待つに寛恕を以ちてして、漫りに他人の過失を責め、不能を強ひ、嫌忌を行ふ等のことなく、務めて己の心を以ちて人の心に體すべきこと。
- (三) 他人の能はざることを強ひ、他人の好まざることを苦しむ等の行ある時に、遂に憎怨を受け、罵詈を蒙り、己の不利不益たること。

(教授方法)

寛なれば、衆を得善を嘉して、不能を矜む、などいへる論語の言葉より説

き起して、識見の寛宏量大、あらざるべからざることを教授すべし。

(問詞)

- (一) 加藤嘉明の常に愛蔵せし器物は何なりしや。
- (二) 侍臣は如何ある時に、其の器物を毀ちたりや。
- (三) 嘉明は、如何に侍臣を處置せしや。
- (四) 嘉明は、何故に餘の九枚を毀ちしか。

(應用問詞)

- (一) 子等若隣坐の生徒に、誤りて子等の書籍を黒汁みて汚され、而して其の生徒子等に向ひて、一言の謝辭を述べざる時に、子等之を如何にせんと欲するか。

(書取題案)

- (一) □□ハ□ノ□ハザル□チ□メズ□ノ□クセザル□チ□ヒズ□ノ□マザル□チ□メズ

(作文題案)

- (一) 己の欲せざる處を人に施すこと勿れ
- (二) 度量寛宏あるべし
- (三) 他人の手本を汚せしを謝する書牘
- (四) 右謝狀に答ふる書牘

清 廉

(例話) はつ、美濃の國石津郡高須上町の農夫太助の妻なり、はつ一夕寺院の法會に赴かんとて、出で行く途中にて金二両を拾ひしが、遺失せるものゝ定めて心を痛め探索せるならんと思ひ、因りて寺に詣ることを止め、家に歸りて夫太助に語り共に諸方を尋ねしに、高須横町の又太郎なるものの家に來りて、近江國の商人が遺失せしことを知り、大に喜び急に其の家に至りて金を返へし與へ

家に歸りて
其の金を如
何にせしと
思ふや

又雁を如何
にせしか

けきは、商人の深く其の厚意を謝し一羽の雁を贈りて之に答へしを、夫婦は辭して去らんとせしが、強ひて已まざるを以ちて受けて歸りしも、拾ひし金を其の人へ返へたりとて報酬に預るの理あら、徒に之を料理せんは本意なれと思考せしに、幸其の裏町に、さんと云ふ寡婦ありて、頗困窮し、屋破れ雨漏るも修覆を加ふること能はざるに因り、夫婦の之を憐み其の雁を賣りて錢に換へ、尙若干錢を増し修繕費の資本と爲し、近隣の義捐金を募りし、人々夫婦の慈善に感じ争ひて錢を贈り忽修繕を畢りたり、領主之を聞き、特に錢若干を賜ひ、以ちて其の行誼を褒彰せり。

(格言) 恩を施すと雖、後に其の報を得んとするの念

あるものは、善を行ふにあらず、唯恩を交換するのみ。(勸善酬答)

(教授要旨)

- (一) 誠實の心を以ちて、人の艱難を救ひ、困窮を恤み務めて徳行を爲すべきこと。
- (二) 徳行を爲し、以ちて他人に恩を被らしむるも、唯其の報いの來らんとを望みて、遂に自己に益をえるの念あるべからざること。
- (三) 其の報いを望みて、人を憐恤し扶助するもの、決して徳行たらざること。

(教授方法)

清廉の徳を、事實を照し了解せしめ、併せて慈善のことをも説述し、以ちて格言に歸納推理せしむべし。

(問詞)

- (一) はつ女の寺院に赴く途中にて、金子を拾ひ如何せしや。
- (二) 商人より報酬として贈りし雁を、如何ましたるか。
- (三) 領主の、何故はつ女を、賞賜せられたりや。

(應用問詞)

- (一) 我がほししと望める品を、他人之を與へんとせば、猥りに之を貰ひて、可なりや如何。

(書取題案)

- (一) □□□□□□後に其ノ報ヲ得ントスルノ念□□□□□□□□ヲ行□□□□□□唯恩ヲ交換□□□□

(作文題案)

- (一) 正直
- (二) 廉潔
- (三) 遺失品を届けられしを謝する文
- (四) 悠深き人の心と、降る雪と

つもりく、て道を忘るゝ。

貞淑

宿瘤の儀仗を觀するに何故ぞ
宿瘤の此の時如何せしと思ふか

(例話) 支那齊の國に一人の女あり、其の項に大なる瘤あるに因り、人々綽號して宿瘤と云へり、或る時其の國の君閔王、出で遊びしかば、百姓皆爭ひて其の儀仗の盛あるを觀しに宿瘤の唯獨桑の葉を採りて之を見ざりければ、閔王怪み召して其の故を問ふに、宿瘤對へて曰、妾父母より桑を採るべきことを命せられたれども、未大王の儀仗を觀るべき教を受けずと、王大に其の言に感じ直に之を載せて宮に歸らんとせしを、宿瘤辭して曰、妾父母の在る有り、今其の命を受けずして、大王に従ふは是奔女なり、大王

何れぞ奔女を用ひたまはんや、王其の言に慙ぢ、乃使を遣して多く物を贈り、其の父母は乞ひて宿瘤を迎へ、宮中に入れて終ゝ立てゝ后と爲せり。

(格言) 女ハ、容よりも、心の勝れたるを、善とすべし。

(女大學)

(教授要旨)

- (一) 才徳ある婦人の、容色を飾りて美を致さずと雖、其の才徳自外に露るべきこと。
- (二) 婦女子の務むべきは、一に貞靜淑婉の徳に在りて、容色の醜美に決して顧みる所はあらざるべきこと。

(問詞)

- (一) 宿瘤とい、何の義ぞ。
- (二) 閔王出遊せし時宿瘤の、如何してありしや。

(三) 何故に宿瘤の、閔王の儀仗を觀ざりしか。
(四) 閔王の宿瘤を載せて歸らんとせし時、宿瘤の如何ある言を、以ちて之を辭せしぞ。

(五) 宿瘤の遂に如何せしや。

(應用問詞)

- (一) 富貴利達の爲に、父母の命を受けずと雖、一身を進退して可ならんか。
(二) 一賤女より起りて王妃と爲ること、實に光榮の至りなり、而して閔王の使を遣し、宿瘤の父母に乞ふ時、當りて、若父母之を肯せざれば、宿瘤の如何にせしと思ふや。
(三) すがたこそ、深山がくれの朽木なれ、
心の花になに都人。
どの如何あることを詠せしものぞ。
(四) 身もつゝれ、心にしき世の中の、
人の見かけに、よらぬものなり。

との意味を問ふ。

(作文題案)

- (一) 人のみめより心がら
(二) 婦女鑑を贈る書牘
(三) 女は女らしくせよ
(四) 女の心得を問はれしに答ふる書牘

敬師

(例話) 僧卓榮の豐後の國杵築淨國寺の徒弟かりしが、其の師卓譽、長昌寺の僧と紛議を構へ、遂に訴訟及び江戸に召し寄せらるたり、然るに卓譽理屈して八丈嶋に流さるゝに、卓榮之を聞き、乃法廷に詣り、嗚咽して其の罪を赦さんことを請ひしが、吏怒り叱して之を逐ひければ、翌日

是に於きて
卓榮の如何
かせしと思ふ

又往きて請ふ、更叱れ追ふこと前日の如し、然きとも志氣更に屈せず、毎日往きて請ふこと凡十六年の久しき、風雨寒暑と雖、未嘗一日も缺きことあり、此の事遂に將軍に聞けけきは、將軍大に感歎し、殊に卓譽を赦し歸らしむ、時に下總の國古河十念寺に住僧なきを以ちて、卓榮に命じて其の住持と爲し以ちて其の義を賞せらるたり。

〔格言〕 業を受けし長上の如き、古より一日師たれば、終身

父たりと云ふ、豈恩を忘れ、義に背くべけんや。

〔六藝衍義大意〕

〔教授要旨〕

〔一〕師の我を教誨して、蒙を發し味を開きたるものなれば、之を尊敬すべきこと。

〔二〕師の父母より亞きたる大恩人なれば、一旦師として事へたる人の、歳月の長短に關せず、常に之を尊敬すること、父母の如くし、終身其の恩誼を忘却すべからざること。

〔三〕師の平日之を尊敬すべきのみならずして、師の身に於きて艱難急戚等の事ある時に、身命を擲ちて、之が爲に力を盡すべきこと。

〔教授方法〕

君父師の、人生の三大恩と稱して、尤敬重すべきものあれば、一旦業を受けて之に師事せば、終身其の恩義を服膺して、之が報効を圖らざるべからざること、を以ちて、例話を説述し、而して後格言に入り、今世弟子たるもの、其の師に對する尤輕薄なることを警戒し、以ちて師の尊敬すべきことを懇諭すべし。

〔問詞〕

〔一〕卓榮の師の、如何なる事を以ちて、八丈島に流されしや。
〔二〕卓榮は師の流罪と爲りしを聞きて、如何したるか。

- (三) 卓榮再法廷に至りて再叱せられし後は如何せしぞ。
- (四) 卓榮の行誼は遂に如何の結果に至りたるか。

(應用問詞)

- (一) 卓榮は法吏より叱せられつゝも十六年の久しき間毎日法廷に哀願したるは、何故ぞや。

(書取題案)

- (一) □ナ□ケシ□□ノ□キ□ヨリ□□□タレバ□□□タリト云フ□□
ナ□レ□ニ□クベケンヤ

(作文題案)

- (一) 師に事ふる心得
- (二) 師の病氣を見舞ふ書牘
- (三) 師弟の關係
- (四) 師より物品を呈する書牘

果 斷

高時は何故に怒りしや

(例話)

脇屋義助は新田義貞の弟なり、義貞北條高時を討せんことを謀りし時、會高時、兵食を調發し錢を新田に課して吏卒を縱ち催促せしめければ、義貞其の吏を斬り首を里門に梟せり、高時大に怒り、新田氏を撃たん欲す、是に於きて新田氏一族會議せしに、或曰利根川に拒がん、或曰越後に赴きて宗族に依らん、義助進みて言ひて曰、二つのもの皆良計はあらざるなり、坐して強敵を待ち、情見を形屈する時、我が兵内は潰えて、一敗し人をして新田氏使者を賤ひ、而して誅せらるゝて死せりと曰はしめん、死するは一なり、寧王事に死せん、今兵馬寡しと雖、出で、國中は

徇へ、衆附かは則進みて鎌倉を攻め、否らざきは、則戦ひて死せんのみ、坐して誅殺を取ると孰きか宜しきやと、衆皆以ちて然りと爲す、乃兵を起して、義兵を挙げ、遂に進みて鎌倉を攻め、之に克ち北條氏を滅せり。

(格言) 思慮して善惡を善く明めたらば、必決定して猶豫なく行ふべし。(大和俗訓)

(教授要旨)

- (一) 智慮ありと雖、之を斷行するの勇決なければ、折角の好案妙思も機會を失ひて水泡に歸し、遂に其の一身をも誤るに至るべきこと。
- (二) 故に意を誠にし理を窮めたらんに、速に斷行從事して、決して遲疑猶豫すべからざること。

(問詞)

- (一) 北條高時の新田氏を撃たんとせし時、新田一族の議は如何。

池定勝は何れの藩士か

愛 國

(應用問詞)

- (一) 義助の果斷とい、何を指せしものありや。
- (二) 脇屋義助は、如何なる策を書して、衆議を排したりや。
- (三) 義助、畫策の結果は、如何なりしか。

(例話)

池定勝は土佐の藩士なり、始めの名は藏太と曰ふ、後、姓名を變じて細川左馬之助と稱し、又細江徳太郎と稱す、少くして義氣慷慨、夙に國勢の衰頹を憂ひ、同志の士と謀り將に爲す所あらんとせり、文久三年藩廳の命を以ちて江戸に在り、還りて大坂に至り、姓名を變じ長門の國に赴きしが、發するに臨みて書を藩邸に留めて曰、臣の去る所以、決して祖宗數百年以來の鴻恩を忘れにあらす、

遊撃隊の参謀は誰ぞ

熟々當時の勢を察するに、苟志氣あるものの決して座視傍觀すべき時にあらず、臣等唯其の竭すべきを竭し、以ちて國家萬一の裨益を謀らんと欲するのみと、是の時に當りて、長藩ハ殊に天下に先ちて攘夷の事を行ふ、定勝撰はれて遊撃隊の參謀と爲り、佛艦を赤馬關に迎へ討ち功あり、全年八月中山忠光を推して將と爲し、兵を大和に擧げしが、定勝常に先鋒に在りて忠光を擁護せり、九月十三日戰方ハ急なり、定勝力戰して敵を斫るゝ算なく向ふ所披靡す、乃間に乘じて忠光を脱せしめ、自數百人を率ゐ戰ひ且退く、衆寡敵すること能はずして盡餘兵を亡す、定勝單騎追兵の圍む所と爲り、縱横馳突し遂に圍みを潰して大阪に走る、其の全志と再擧を謀らんとするの約を踐むな

定勝は何故やに自殺せし

り、後再長州に在り偶航して肥前の壩屋崎を過ぎ、颶風俄に起り激浪天を打ち舟空中に掀翻し、殆將に覆没せんとす、定勝其の生くべからざることを知り、船中に在りて自刃して死せり、時に年二十六なり。

(格言) 君に忠ふれば、自然に國を愛す、國を愛するは、

即これ君に忠なり。(習是語)

(教授要旨)

- (一) 我々臣民は、祖先以來我が皇室の鴻恩を蒙れるゝ因り、皇室に忠事すべきこと。
- (二) 皇室は此の國土を統治し玉ひて、國土と皇室とは一なれば、我々臣民は君の爲國の爲、如何なる事よても力の及ぶ限り、命の存する丈は、忠實を盡して報効を圖らざるべからざること。
- (三) 苟性命を偷みて、一國の休面如何を顧みざるが如きは、即是君よ不忠

不義たること。

(問詞)

- (一) 池定勝の人と爲り、如何。
- (二) 定勝の長州に赴きし旨意、何ぞ。
- (三) 定勝、長州に在りて如何ある事を爲えしか。
- (四) 定勝の兵を大和に挙げし時の景況を語れ。
- (五) 定勝、如何にして死せしや。

(作文題案)

- (一) 國民の義務
- (二) 人の愛國心あかるべからず

孝行

勘六は何地の人なりや

(例話)

勘六は和泉の國岸和田濱町の桶工なり、父を熊平

勘六の性質如何

と曰ひ母を、かめと曰ふ、りめ二男一女を産めり、長子は即勘六にして、次は十次郎、次をさんと曰ふ、熊平死して後十次郎は他家の養子と爲り、かめ、勘六と、さんとの二人を携へて、七右衛門あるものゝ再嫁し、又一子を産む吉兵衛と曰ふ、初め、かめの七右衛門に嫁せし時、勘六は年僅に十二三歳ありしが、七右衛門家貧しくして宅地をも典せしかば、勘六は人の僕と爲り、得る所の給金を以ちて其の乏しきを補ひ、居るを十二年にして家に歸れり、然れども性質篤實として、其の艱難を嘗めしことを少しも口に出さず、七右衛門を待する眞の父の如くせり、是よりさき七右衛門は、河合村の八郎兵衛なるものの家へ赴き、桶工を爲しが、一日俄に中風の病起りし由報じ來りしかば、舉家愕

勘六さむらい暑き日
には父を如
何にせしや

驚し駕籠を以ちて迎へ歸り、種々療養を加へ、勘六ハ良藥あるを聞けば、道の遠きをも厭はず、買ひ來りて之を服せしむれども、固より重症なきは、左方の手足遂に痿痺して用を爲さざるに至れり、さきさき心ハ常に變ぜざれば、苦悶の餘り飲食の好みありしを、毫も其の意ハ悖るをなくして、悉之を供し、或田面を見巡りて以ちて餅を散せんことを望めば、弟吉兵衛が背ハ負はせ、勘六ハ其の後に附き従ひ、暑き日ハ樹蔭に涼を取らしめけり、七右衛門病重きに及び食物口ハ入れども、口中も亦意の如くならざれば、勘六ハ稚兒ハ食せしむる如く、一日中に數回之を運ひ進め、寒き時ハ其の食物の冷えざるやうに心を用ひ、兩便の時の起居も、女のみ委ては不安心なりとて、兄弟

共ニ業を擲ちて之を扶助し、夜ハ交々看護せり、然るに長病のことなれば、家内の人々動もすれば怠慢の狀見ゆるを以ちて、勘六之を諭して曰、凡世の中に親の如く重すべきものハあらざるなり、若一旦亡後ハ當りて何を進めん、又再看護せんと欲するも能はず、故に命の有らん限りハ、力を盡し、毫も遺憾なからしめざるべからず、長き歲月の事と思へバ厭くてもあるべし、只今日明日の事と思ひて、厚く看護せば何の厭くことか有らんと、人々皆其れ言に服せり、七右衛門ハ遂に安永二年を以ちて死せしが、領主其の行を聞き、翌年米若干を賜ひて、之を賞せしとぞ。

(格言) 父母死して後は、孝を盡すこと成り難きを、豫ねて能く考へ、後悔なからんことを、思ふべ

し。(童子訓)

(教授要旨)

- (一) 人の子たるもの、父母鞠育の勞苦を念ひ、之に報するは孝を以ちてせざるべからざること。
- (二) 父母の生存するに當り、子たるもの、務めて力を尽して之を孝養し、其の亡後毫毛の遺憾なきを期すべきこと。
- (三) 父母の生存せる時に於きて孝養を致さず、而して亡後徒に香花を供し、祭祀を厚くするも、之を孝と謂ふべからざること。

(教授方法)

孝行のしたいとふんに、親はあし。之等の解し易きことより、説き起して事實と格言とに移り、其の感覽思慮を確むべし。

(問詞)

- (一) 勘六と七右衛門とい、如何なる關係なるものなりや。

- (二) 勘六は、如何にして七右衛門の貧窮を補助したるか。

- (三) 七右衛門の病中、勘六が孝養せし一斑を、語れ。

- (四) 勘六の家内の人々を、諭せし言ひ、如何。

(應用問詞)

- (一) 世の中に、あらぬわかれの、なくもがな、

千代もといのる、人の子のため。

この如何なることを、詠せしものか。

(書取題案)

- (一) □□□シテ□□ハ□ナ盡スコト□□□□キナ豫○○□□□へ□□ナカ
ランコトナ□□フベシ

友愛

(例話)

泉仲愛は、熊澤了介の弟にして、備前の國岡山の主

何故に通常
の裁断をし
て裁断せし
むべからざ
るか

仲愛の斯く
容易に判決
せざるの何
故と思ふか

池田芳烈公は仕へ、吏事を以ちて才幹の譽あり、時に領民
田を爭ふものあり、互に數十人の證援ありて訴へ出づ、公
以爲らく是骨肉の親を以ちて田を爭ふ倫理に背けり、獄
吏をして裁判せしむべからずと、乃ち仲愛を召して之を決
斷せしむ、仲愛盡其の證援の人を歸らしめ、獨兄弟を家に
召し寄せ一室に居らしめ、下僕をして謂はしめて曰、主人
公事あり訟を聽くは違あらず頃待てと、食を與へて共に
食はしめ、又同じく入浴せしむ、己にして日暮れたり、更に
謂はしめて曰、公事未異らず今暫く屈を忍べと、因りて一
の火鉢を供して暖を取らしむ、時十二月の半にして寒
氣骨に徹す、兄弟進みて火鉢を擁せしが、是の時まで未
一語を交へざりしに、兄忽憶ひ起す、やう、幼き時、弟と共に父

兄弟二人は
仲愛に如何
なることを
告げしや

母の側に嬉戯し、嘗相忤ひたることなし、今年長ずるに及
びて此の争ひを生ず、父母若在さば之を何とか謂はんと、
覺えず悽然として自悔い、顔色を和け弟に語りて曰、吾汝
と此の争ひを起す未始めより此に至らず、但證者の教唆
するを以ちて勢止むを得ざりしなり、今此の訟を止め兄
弟力を協せて、其の田を耕すこと豈本意ならずやと、弟も
亦大に感悟する所あり、仲愛に告げて訟を止めんことを
請ふ、仲愛大に悦びて兄弟を前より召し諭すに、連枝相伐る
べからざるの理を以ちて、兄弟感泣して大に愧ぢ、遂に
友愛を以ちて世を終りしと云ふ。

(格言) 親類一門多しと雖、父母を去りては、兄弟ほど
親しきはなし、如何にぞ疎にすべけんや。(中大順和)

（教授要旨）

- （一）兄弟姉妹は皆同根連枝のものなれば互に相愛して兄弟姉妹を憐み、弟妹は兄弟を敬し、決して悻悻紛争等の事あるべからざること。
- （二）兄弟姉妹は相互に善を勧め、惡を戒め、共に善良の道に進むべし、若忿争する等の如きことあれば、實に手足の情を知らざるものにて、禽獸にも若かざること。
- （三）兄弟姉妹は、相倚頼して共其の利を分つべし、唯自己の利益のみを謀る時に、遂に之が爲に相紛争喧怒して、友愛の情を傷ふに至るべきこと。

（教授方法）

父母につぎて親しきものは兄弟なり、且兄弟は五本の指の如きものなれば、相助け相救ひ永く其の親を失ふべからざることと懇諭すべし。

（問詞）

- （一）仲愛兄弟の訟を聴く前に二人を如何したりや。

- （二）仲愛は如何なる判決を爲さしか。
- （三）兄弟の訟を止めしは如何なる所以なるか。
- （四）二人は遂に如何なる人になりしや。

信義

細井徳民の
人となり
を問ふ

何故に異姓
の人々たる
ことを知ら
ざりしか

（例話） 細井徳民は尾張の人あり、博愛篤厚にして能く人を容る、其の江戸に在る時、友人小河某、飛鳥某、皆妻を挈へて徳民の家に寄寓せり、是より於きて三家飯を同じくして炊ぐこと四年なりしが、小河飛鳥の二人、徳民の父正長に事ふること、恰生父に於けるが如く、徳民と交ること兄弟の如し、三婦も亦相待つこと姉妹と異らず、歲月の久しきを積み付、倦み厭ふの色なかりしや、近隣の人初め其の異姓の人たることを知らず、皆正長を賀して曰、家より三

賢子、三孝婦、三順孫を具ふ、翁の天福を享くこと、何れぞ此くの如く厚きやと、其の後小河飛鳥別居せしに、幾もなく小河歿し、徳民喪祭を具すること兄弟れ如く、飛鳥の死せし時も亦此くの如くし、且其の妻と女兒とを家に養ひ、後資装を具へて女を嫁せしむ、小河の子長じて才學あり、徳民之を尾藩に薦めて儒官と爲せり、其の他學生の遠方より來りて塾に寓するもの、死すきは久しくして其の殯所を失はんことを慮り、爲に貲を捐て、墓を立て、其の姓名を記せり、而して此くの如きもの數十人の多きに及びたりと云ふ。

(格言) 朋友は、道同じく志合ひて、相交るものなれば、
自、詐偽の心なく、信義を以ちて、切磋すべし。(張道榮)

(教授要旨)

- (一) 朋友は、信實を以ちて相親愛し、同胞の兄弟の如くすべきこと。
- (二) 朋友は、平生吾と相益するものなれば、患難相濟ひ、得喪を以ちて其の交りを渝へず、終始一なるべきこと。

(教 方法)

信義は、人の品行上よ於きて、至大至重なる勢力を有するものなり、何とあれば、人誠實信義にして、世に信用せられれば、百事ならざることなし、若信義を失ふに至らば、天下我を助くるの人なきに至るべし、このことを教授すべし。

(問 詞)

- (一) 細井徳民の家を寄寓せし人は、誰ありしや。
- (二) 三家相寓せし時の状況は、如何ありしか。
- (三) 近隣の人々が、徳民の父を賀せし言ひ、如何。
- (四) 小河飛鳥の二家別居せし後、徳民如何せしや。

(五) 徳民の二人の朋友に、厚かりしのみか。

(應用問詞)

- (一) 友の中、不幸に遭遇せしものあらば、汝等如何にするぞ。
- (二) 汝が隣家の人、ふと怪我せしと聞かば、如何よしして可なりや。

(書取題案)

左の語辭を、書取らしむべし。

- (一) 友愛の情厚くして能く人を容れたる
- (二) 三家既を同じくして炊くこと四年あり
- (三) 徳民と交ること兄弟の如し

格言

(作文題案)

- (一) 誠實
- (二) 信義
- (三) 知友の病褥にあるを慰むる書牘

(四人より依頼されしことを取調べ答ふる書牘)

勤 學

(例話)

仁齋の家
素何を業と
せしや

伊藤仁齋、名は維楨、宇の源佐、仁齋の其の號あり、又、古義堂と號す、京都の鴻儒なり、其の家、素商を業とせしが、仁齋幼き時より穎異挺發、して群兒に異り、其の始め句讀を習ふ時、已に儒を以ちて一世に著きんと欲するの志あり、長するに及び益堅苦自勵あり、親戚の人々、利に迂なりとして之を沮み、無用の學問を爲さんより、醫術を學びて生産を致すに如かずと云ひけきども、仁齋決して從はず、遂に大儒と爲れり、肥後侯祿千石を以ちて之を招きしに、辞するに母老いて侍養人なきを以ちてして之

此の時仁齋
先生の如く
先處に思ふ
かれしと思ふ

に應せず、其の生徒を教授すること四十餘年、天下の學者四方より來りて之に歸し、國として至らざるはなく、唯飛彈、佐渡、壹岐、三州の人の門に及ばざるのみ、さきバ謁を執るの士千を以ちて數ふるに至り、實に一代の儒宗なりき。仁齋嘗て夜行し郊外を過ぎし、劫賊數人路を遮り、各劍を抜き、仁齋に逼り、吾等酔ひされば樂しからず、然るに一錢の酒資もあるを、客入金あらば速に出せ、若金なければ、自衣裳を脱ぎて吾等に與へよと云ふ。仁齋神色少しも變せずして曰、今日適囊錢を乞ふ、敝れたる縵袍にして可かきは、速に脱ぎて諸君に贈るべし、但し君の輩は常に何事を以ちて其の業とせるや、賊答へて曰、問はざるも自知らん、昏夜に横行して人の財物を掠め奪ひ以ちて自給す、

盜賊を以ち
業と爲せ
て拒まずと
いふ故ぞ

賊の此の言
を聴きて何
如なる感
思ふぞ

是其の業なり、仁齋笑ひて曰、既に盜賊を以ちて業と爲せば、吾如何んぞ之を拒むことを爲さんと、直に衣服を脱ぎて之に授け、將に過ぎ行かんとせるを、賊等遽しく之を止めて曰、吾が儕草竊に衣食せること數年なれども、未嘗舉止君の如きものを見ず、抑君の如何なる人を爲すものか、仁齋曰、儒者なり、賊曰、儒者といふ如何なる事を爲すものか、仁齋曰、儒者は人の道を以ちて人々を教ふるものなり、賊又問ひて曰、人の道といふ何ぞ、仁齋曰、人の道といふ、親は孝に、兄は悌に、一日も無かるべからざるものはなり、人として道なければ、是禽獸に異らざること、言未畢らざるに、賊皆頓首涕泣して曰、噫、君と我といふ均しく是人なり、然るに事業の迥に異なることは是くの如し、我等甚耻づ、願はくは君、吾が儕の罪

を宥して人の道を教へ賜へ、今よりして後の灰を飲みて胃を洗ひ、謹みて教を門下に奉せんと、遂に心を改め自勵みて良民となりたり。

(格言) 嘉者ありと雖、食はざれば其の旨きふことを知らず、至道ありと雖、學ばざれば其の善きふことを知らず。(禮記)

(教授要旨)

- (一) 人の天賦の徳性ありと雖、學ばざれば能く道を知ることなし、故に必當に先覺に就きて學習すべきこと。
- (二) 荷師とする所なくして、才を恃み自用ふる時の徳を傷ひ、事を敗るゝとあり、若一旦學習する所あれば、豁然貫通して、大に了悟感發することあるべきこと。

(問詞)

- (一) 仁齋先生の如何にして大儒と爲られしか。
- (二) 賊徒の仁齋先生に迫りし時、先生の如何にせられたるか。
- (三) 仁齋先生の衣服を脱して、賊に授けられし時、賊の如何せしぞ。
- (四) 賊徒の心を改めて、良民と爲りしは、如何なる事に因りてか。

(書取題案)

- (一) □□アリト□□ハザレバ□□ノ□キコトナ□ラズ□□アリト□□バザレバ□□ノ□キコトナ□ラズ

(作文題案)

- (一) 學問の益
- (二) 人多き人の中にも、人ぞあき、人となれ人、人となせ人。

義勇

齋藤實盛の
源平何れの
士あるか

(例話)

齋藤實盛は平氏の士なり、源頼朝兵を東國より起し、義仲兵を北陸より起す。及び平氏維盛等を以ちて追討使と爲し、兵を將ゐて北陸道に入る。是よりさき富士川の戦い、實盛關東將士の騎射精強にして當り難きを稱し、軍士大に懼きて遂に戦はずして走りければ、是に至り宗盛に請ひて曰、臣必死を此の戦に致し、以ちて前日の耻を雪がんと欲す。唯越前へ臣の郷里よりして親姻皆あり、古語に曰ふ、錦を衣て郷に還ると、願はくは錦の直垂を著けて以ちて歸らば死するも餘榮ありと、宗盛之を憫み其の言の如くせり。既にして義仲と大に篠原に戦ひ、平氏の軍敗績し衆悉退きしに、實盛獨留り戦ふ。敵將手塚光盛呼びて其の名を問ふ。實盛曰、只我が首を取り木曾公に獻せよ。公は我を

實盛は何を
以ちて獨戦
ひしか

樋口兼光之
を見て何と
云ひしぞ

知れりと進みて光盛に薄りしが從者之を遮れり。實盛之を攫めば光盛之を救ひ、三人相搏ちて馬より墜つ。光盛遂に實盛を刺し頭を義仲に獻じ、其の狀を告げて曰、單騎にして錦を衣、其の語は東音なりと、義仲熟視して曰、噫是齋藤實盛ならんか。吾實盛の年高きを知る、然るに今髪は黒き何ぞや。樋口兼光は實盛と舊相識なり、或之を辨せんと、乃兼光を召して之を視せしめしに、兼光一見し潜然として曰、是實盛なり。實盛嘗臣と東國に言ひて曰、我年老い力衰へて毎に侮みを壯者に取る、他日戦に臨まば當に鬚髪を染め以ちて壯者に伍せんと、今果して其の言を踐むかりと、乃其の頭を洗へば鬚髪皆白し、義仲泣きて曰、吾幼にして孤なり、此の老の鞠育する所と爲る。若之をして來

り歸せしめば、將に之に父と事へんとす、然るに恩を重んじて死に就く、義士と謂はざるべけんやと、戸を收めて厚く之を葬れり。

(格言) 世の人におこらじと思ふ、一筋は、老いもへだてぬ、物部の道。(源定信)

(教授要旨)

- (一)人は、一身の富貴利達に拘りて、道を廢て義に背き、以ちて苟安を謀るべからざること。
- (二)苟一身の利害に拘りて、威武に屈し、富貴に淫し、爲すべき事を爲さず、死すべき日又死せざるの、勇武なく、義氣なくして、怯夫たること。

(教授方法)

公義の爲に身を惜まず、死を視ること歸するが如くなるは、義勇の至りなり、どの意を剴切に講話教授すべし

(問詞)

- (一)實盛の、何故に死を決ししか
- (二)實盛の、如何にして死したるか
- (三)實盛の髪を染めし意の、如何
- (四)義仲、實盛の首を視て、泣きし言の、如何

(應用問詞)

- (一)實盛の義勇たる所以の、如何あることを、指ししものか。

(作文題案)

- (一)國民は義勇あかるべからず

勉職

司馬光の支那朝の人
ありや

(例話) 司馬光の支那宋の人なり、哲宗皇帝の時宰相と爲り、太皇太后、及哲宗共に己を虚しくして、以ちて光の言を

人^は對^{して}言^ふべ^{から}ざる^{もの}故^ぞ

聽く、光自言行を計從へる、を見身を以ちて國に殉せん
と欲し、庶務を躬親して晝夜を舍てず、賓客其の体の羸を
たるを見、諸葛亮の食少くして、事煩しきを舉げて以ちて
戒めしに、光曰、死生の命ありと、益力めたり、病革ある時も
諄々として語ること夢中れ如く、少しも他事し及ばず皆
朝廷天下の事なり、卒するし及びて太皇太后之を慟哭し、
哲宗と共に其の喪に親臨し、京師の人爲し市を罷め往き
て吊す、葬るし及び送るもの私親を哭するが如く、都中四
方皆像を畫し以ちて祀きり、光少き時より老ゆるに至る
まで、語ること未嘗妄ならず、自言ふ、吾人に過ぎたるもの
なし、但平生の爲す所、未嘗人に對して言ふべからざるもの
のあらざるのみと、其の誠心自然し天下敬信し、陝洛の間

皆其の德に化し、不善あることあれば、曰、君實之を知るを
母きを得んやと、君實といふ光の字なり、光嘗邵雍に問ひて
曰、余は如何ある人ぞ、雍曰、君は脚實地を踏むの人なりと。
(格言) 之に居て倦むことなく、之を行ふは忠を以ち
てす。(論語)

(教授要旨)

- (一) 人の各職あり、人々其の職の當に爲すべき所を勉めて、其の外を願はざる時、邦國治安にして、上下共に景福を受くべきこと。
- (二) 邦國の爲に利益あること、在官と在野とを問はずして、當に奔走盡力之を爲すべし、况や其の官に居り其の祿を食むもの、此勉事に從ひて敢猶豫し其の職を曠しくすべからざること。

(教授方法)

教授の方法を、演繹的に資れ。

(問詞)

- (一) 賓客の司馬光に、少しく逸すべきことを勧めし時光に如何せしや。
- (二) 光の職務に勉強せる証跡あり、如何。
- (三) 光死せし時の景況に如何ありしか。
- (四) 光の自言ひし語は、如何。
- (五) 邵雍は、光を評して何如なる人なりと、言ひしか。

(應用問詞)

- (一) 學校の小使が掃除などを怠りおぼ、如何。
- (二) 汝等が家の下婢丁稚が、其の職分を盡すとい、如何あることをなすべ
きか。

(書取題案)

- (一) 之○居○倦○〇〇〇〇〇之○行○〇〇忠○以○〇〇〇

(作文題案)

- (一) 丁稚の職分

- (二) 學生の務むべき事柄
- (三) 職務を怠りし番頭を戒むる書牘
- (四) 全く職務を盡し主人より暖廉を分ち與へられたる奉公人を賞する
書牘

謙 遜

服部南郭の
人となり如何

(例話) 服部南郭は有名の儒者なり、名の元喬、字は子遷、小右衛門と稱す、南郭は其の號にして、又芙蓉館と號を、京都の人なり、幼にして穎敏、和歌を善くせり、年十六にして柳澤吉保に仕ふ、壯なるに及び物徂徠を見て大に其の學を悦び、遂に其の門に入り日夜研究を、徂徠稱するに妙才を以ちてす、三十四にして致仕し、帷を下して徒に授く、南郭人と爲り冲雅磊落、交驩の際談笑怡々如たり、其の學博し

と雖深く自韜晦して未嘗師儒の重きを挾まず、居恒雅致を以ちて自居れり、或人れ時事を問ふあれば、則晒ひて曰、文士迂濶にして事務を知らずと、更に空談虚論せざりき。
（格言） 凡人善あれば自矜るべからず、自矜れば善日は削らる、不善あらば自恕すべからず、自恕すれば惡日に滋す。（明太祖）

（教授要旨）

- （一）人の務めて恭敬謙遜を主とし、進退動止、毫も倨傲鮮腆の態あるべからざることを。
- （二）自謙するものは、徳益積み名愈揚れども、自滿てりとするもの、行ひに損じ人多く惜むことを。

（教授方法）

自誇り自驕るもの、名を貪ることにして、名を喪ふの基なり、實を務

め、自謙遜なるもの、名をなすの基なることを、本課より照し教授すべし。

（問詞）

- （一）南郭先生、如何なる人なりしか。
- （二）南郭先生の謙遜ある所、何れに在りや。

（應用問詞）

- （一）そだつ程下へ手をつく、柳かなど、如何なる意味か、事實にあてはめて、説話せよ。

（書取題案）

- （一）□□アレバ自矜○○○○□□□レバ□□に削○○□□アラバ自恕○○○○□□□スレバ惡日○滋○

（作文題案）

- （一）謙遜の徳
- （二）傲慢なる友人を諫むる書牘

新井白石の
名は如何

忍耐

(例話) 新井白石は碩儒なり、名は君美、字は在中、白石は其の號として江戸の人なり、白石、人に應接談話する毎に、必筆紙を側へ置き、我が心得と爲るべき事、又は、山水、風土、物産の類、古今人物の事等、聽くに從ひて割記し、閑暇の時に整頓して著述の用に供す、其の心を用ふること此くの如く深きが故に、其の博學なること古今に傑出せり、平生、困勉の功人の能く及ぶ所はあらず、嘗言へることあり、曰、總身耻疣の出来る程に、業を修むは、其の技長進すべし、人の屈辱に遇ふは、身の藥石なり、人屈辱に遇ふこと多きが故に、道藝長進するものなり、盧美耳を薰ふ、容悅の言のみ

新井白石が
知を得しは
何將軍なり
や

聞きて屈辱に遇ふべきものは、自怠慢に流れ易くして、稟性才識あるものと雖、道藝長進すること難しと、白石遂に幕府に仕へ、知を將軍家宣に得て、從五位下に叙し、筑後守に任ぜられ、祿千石を賜りたり。

(格言) 辛苦の事は、卓絶の才に進むべき道なり、絶妙の地位は、辛苦の人の獲べき恩賞なり。(ルソエ)

(教授要旨)

- (一) 忍耐といふ、人の通常忍ぶこと能はざる所を、忍ぶべきこと。
- (二) 能く忍ぶものの、艱難をも辞せず、危殆をも避けずして、必成るを期すること。
- (三) 艱難辛苦をも辞避せずして、益勇氣を鼓舞し、其の目的の地に到達することを爲すもの、是に因りて才智を研ぎ、經驗を積み、其の成功の大あるべきこと。

(教授方法)

人何事に志すとも、堅忍不拔の氣象あるにあらざれば、決して其の目的を達すること能はず、されば艱難辛苦に耐へ、失敗汚辱を忍び、鴻業を成さんことを期すべき意を、事實と格言とに照し教授すべし。

(問詞)

(一)白石先生の深く心を學事と用ひられしは、如何なる事ありしや。
(二)白石先生の困勉の功を、積むべきことを、言はれし語は、如何。

(應用問詞)

(一)石の上にも三年、とは如何。
(二)滴も、絶えねば石に穴をあけ、とは如何なることをいひしものか。
(三)安積良齋忍耐のことを、話せ。

(書取題案)

(一)□□ノ□ハ卓絶ノ□ニ□ムベキ□ナリ 絶妙ノ□□ハ辛苦ノ□ノ獲
○○□□ナリ

(二)□□耻疣の□□る□□を□むれば□の□□□すべし

(作文題案)

- (一)石の上にも三年
- (二)心棒はかねなり
- (三)あまだれ石を穿つ
- (四)忍耐鎖業に従事する人をいよく奨励する書牘
- (五)忍耐力乏しき人を戒むる書牘

處 事

(例話)

毛利吉就の夫人は少くして寡なり、江戸麻布邸に退隱し能く貞操を守れり、元禄中、近街火を失ひ、焰勢將に居邸に及ばんとするを以ちて、近臣急し火を避けんことを勧めし、夫人曰、我今退き去らば扈從するものの情

毛利吉就夫人の人の人となり

如何ぞや、且邸内の廣き若延焼せば其の時に臨みて退くも、未晚しとなさずと、因りて群臣を戒めて曰、我が家什を以ちて府庫に收むること勿れ、汝等の雜具を封藏して焼失せしむること勿き、急遽の時、當らば、汝等の妻子の吾に隨ひしむべしと、動止自若たり、是に由りて舉邸力を合せ遂に延焼に至らしめざりとぞ。

(格言) 思案は、靜にして急ならざるを良とす、急は決定すれば、必あやまりあり。(貞原萬信)

(教授要旨)

- (一) 事物を處理するに、沈思熟考して、輕躁危漏をすべからざること。
- (二) 沈着謹慎に、事物を處理する時に、多く後悔の舉なくして、周到綿密に事を爲すべきこと。

- (三) 急遽に事を爲し了れば、關點横出し、忽後悔を來し、遂に失敗を免れざるべきこと。

- (四) 造次傾沛の際に、思慮浮動し易きものあれば、殊に意を用ひて處置すべきこと。

(教授方法)

事を處する、如何なる急遽の際と雖、周章狼狽せず、沈思熟考して、臨機應變の處置をなさざるべからずとのことを、事實と格言とに照して克く講説すべし、讀方教授と、一同ならざるやう注意を乞ふ。

(問詞)

- (一) 毛利氏の近衛火を失し、近臣夫人に之を避けんことを勧めし時、夫人、如何せしか。
- (二) 夫人の群臣を戒し言ひ、如何。
- (三) 毛利氏の邸に、遂に如何なりしや。

(應川問詞)

- (一) 學校の近街、火を失するあらば如何するぞ。
- (二) 汝等在校中、家の近傍に出火ありと聞かば、如何するぞ。
- (三) 汝等夜中、地震あらば、如何にすべきか。
- (四) 汝等弟妹を同伴し、途中に於きて奔馬に出で遇ひしならば、如何に處置するか。
- (五) 汝等が家人の中、俄に卒倒せし人あらば、如何にして可ありや。
- (六) 學校より歸途、子供の池に落ちしを見、如何に處置すべきや。
- (七) 汝等遊歩の際、牛のあれたるに逢はば、如何にして其の害を防がんとするか。
- (八) 行歩中、俄に雷鳴の起ることあらば、如何にして之を避くべきか。
- (九) 父母の命により、使に出でし途中驟雨にあひたるときは如何するぞ。
- (但し家を距ること大約七町)
- (十) 汝等弟妹を背負ひ守をなしつゝ、遊べるるとき、何に驚きしか、弟妹の俄に泣き叫ぶときは、處置を如何んとするか。

博愛

義齋は何國の人ありや

(例話)

義齋は加賀の國の人なり、幼時家を出で醫を京師に學ぶ、身は雲水の僧に似て、足に任せ諸國を遍歴して更に一定の住所なし、晩年某侯の聘を受け、攝津の國豊嶋郡麻田に住す、性仁心深く、貧困者の病に罹るものあるを聞けば、遠近を論せず、必自行きて之を診察し、良藥を與へて之を救ふ、治するに及びて更に酬謝を受けず、病後貧甚しく、自活すること能はざるものあれば、或米塩を與へ、或資本を與へて糊口の道を授く、麻田の近隣三四里の間、貧民の其の澤を蒙らざるものなし、一日領主風邪に襲はれしを以ちて、義齋を召して診断せしめけるが、衣服の塵垢に

義齋此の老丐兒を如何せしと思ふぞ

汚れたるを見て、一領の紋服を與へしかば、義齋大に喜び拜謝して退きけり。歸路偶丐兒の年老いて病に呻吟せるを見、忽惻隱の心を起し、懷中より藥を取りて、之を服せしめ、且曰今日寒甚し汝が破衣にて凍死を免れずと、直に拜領の紋服を脱し之を與へて立ち去れり。翌朝領主の安否を伺はんとして、此の處を過ぐきは、二三の藩吏一丐兒を捕へて乱打するを見る。漸近けば則昨日の病丐兒なり、義齋何故に亂打するかと問へば、藩吏曰此の老丐我が侯の紋服を盗みて之を服せり、故に撲殺して河中に投せんと欲するなりと、義齋大に驚き謝して曰是丐兒の罪にあらずして余が罪なり、余昨日紋服を拜受して歸る路彼が病みて寒さを見、惻然と耐へざるを以ちて之を與へしな

藩吏の答は如何

義齋の丐兒に與へし紋服を如何と思ふや

り、其の時寒を畏きて襦衣を脱するに懶く、定紋の故を以ちて累ひを君公に及ぼさんとは、更に思ひざりき、之を以ちて彼に代へんと、己が衣服を脱して丐兒に着せ、丐兒が纏ひし紋服を取りて自服し、毫も汚穢を厭ふの態なし。藩吏其の率易にして事物に頓着せざるに驚き、暫茫然たり、後士人相議して曰義齋老人の、深仁寡慾、眞に神の如くなきは、一祠を築きて之を祭るべしと、遂に一小社を建て、年々之を祭れりとぞ。

(格言) 仁言ハ、仁心の誠に如かず、近を利るすは、遠を利するの博に如かず。(李邦彦)

(教授要旨)

(一) 仁愛慈恵は、人の人たる所以にして、人ハ、一日も此の心を失ふべから

ざることを。

(二) 仁慈は、固より美德なりと雖、唯私愛偏惠の行ひなく、汎く之を行ふべきこと。

(三) 口舌以ちて之を撫慰するより、一片の實行を爲すに若かざることを。

(教授方法)

世の中の人は慈悲あれ、なさけあれ、

情あくとも、千年をば経じ。

之等の歌意より説き起して、同感の情を惹起し、慈惠博愛の感覺思念を養成すべし。

(問詞)

(一) 義齋、貧困者の病に罹る時、如何せしか。

(二) 義齋は、貧困者の病を治して、報酬を受けざりしのみなるか。

(三) 義齋、老丐兒を救ひし事の概況を語れ。

(四) 村民は、如何に義齋を尊敬せしや。

(應用問題)

(一) 乞食に、錢など與へんとする時は、投げ與へて、可ありや否。

(二) 憐むべき年老いたる乞食、物を乞ふとき、如何するぞ。

(三) かちふれて、袖は涙のかゝるとき、

人の心の奥ぞ知らるゝ。

この歌意を問ふ。

(四) 外國人の道に迷ひて、困難せるを見れば、汝等之を如何にするか。

(書取題案)

(一) □□ハ□□ノ□□カズ□□スルハ□□スルノ□□カズ

(作文題案)

(一) 博愛

(二) 仁慈

(三) 貧民救助を協議せる書牘

(四) 慈善芝居を見物に誘ふ書牘

忠節

伯顔何故
は厚く敵を
葬りしや

(例話) 趙昂發の支那宋の人なり、池州の通判と爲る時、元の將池州を攻めければ、守臣官を棄て、去れり、昂發、妻雍氏に謂ひて曰、城將に破れんとす、我の去り難し、汝先出てよ、妻曰、君の命官にして、妾の命婦なり、君の忠臣として、妾は獨忠臣の婦たること能はざらんや、昂發笑ひて曰、是豈汝の能くする所ならんやと、雍氏先死せんことを請ふ、昂發乃几上に書して曰、國の背くべからず、城の降るべからずと、夫妻同じく節に死せり、元の將伯顔深く之を歎じ、命じて衣冠を具へて合葬し、其の墓を祭れり。

(格言) 君に事へ身を致すは、臣道の當然なり。(習是編)

(教授要旨)

- (一) 臣民の主君に事ふるは、忠勇節義を以ちて根本と爲し、誓ひて二心あらざるべきこと。
- (二) 忠節の臣は、國を憂へて家を忘れ、身を殞して難を濟ひ、其の成るに成らざるを、決して豫計畫する所にあらざること。
- (三) 節に仗り義に死するの士は、患難に臨みて必能く死生を外にし、身の危くすべきも、志を奪ふべからざること。

(教授方法)

忠とは、能く君に事ふるの謂ひとして、人臣たるものは、其の君を敬ひ、其の國を愛し、其の職を勤め、専心一意、忠節を盡すべきことは、當然の道なり、況や、我が邦は、萬世一系の皇室を戴き、千古不易の臣民たるものに於きてをや。

(問詞)

- (一) 趙昂發の將に死せんとして、妻を去らしめんとせし時、妻の對へし言

い如何。

(二) 昂發机上に書せし語い如何。

(書取題案)

(一) □ニ□ヘ□ナ□スハ□□ノ□□ナリ

(作文題案)

(一) 忠臣は孝子の門より出づ

(二) 菅丞相

廉潔

青砥藤綱の
人どあり如
何

(例話) 青砥藤綱は上總の國の人あり、人と爲り廉直剛正なりしが、嘗て旱しけきは北條時頼、僧を聚めて之に施し、又躬三島の祠に祈り、其の束載する所の牛、馬入川にて水に洩せしに、藤綱傍より之を叱して曰、汝も亦北條公の薦

公文の喜び
や如何せし

事に倣ふかと、或る人其の謂を問ふ、藤綱曰、年方に早す牛として知ることあらば、何んぞ田に洩せざる、今日僧に施すも、其の貪廉を判知せず、廉者は寧ろ餓うるも來るべからず、徒ら貪者を飽かしむるのみ、貪ある僧輩は飽くことを知らず、是何んぞ牛の本に洩するを異らんとやと、時頼竊に之を聞き擢で、引附衆と爲し、奏して左衛門尉に任ず、時に公文と云ふものあり、北條氏の邑人と畔を争ひて訴ふ、皆北條氏の威を畏きて公文を曲とす、獨藤綱のみ公平を以ちて公文を直として、此の訴訟を裁決せり、公文大に喜び其の德に報いんと欲し、錢三百貫を包み、藤綱の庭中に投じて去れり、藤綱大に怒りて曰、北條公は天下の直を司る、吾公文を直とするは即ち北條公を直とするなりと、直に

其の錢を還附せしかば、人皆其の廉潔を稱せり。

(格言) 苟能く其の貪心を去りて、分ふ安んじ、節を守らば、何にぞ祿を失ひ、家を敗ることあらんや。(作夜菴目録)

(教授要旨)

- (一) 廉潔なるもの、其の爲す所公明正大にして、毫髪も已に私し、苟貪ることなきこと。
- (二) 廉潔の士は、已を行ふに耻あり、義にあらざれば一毫も敢て人に與へず、道にあらざれば千金も敢て自取らざるべきこと。

(教授方法)

兒童の既に知り得たる、青砥藤綱滑川よて錢を撈する談柄より、本課の實例に説き入り、徐々又格言の意解に推し移りて、廉潔あらざるべからざることを教授せよ。

(問詞)

- (一) 藤綱の牛の川に洩せしを見て、牛を叱せし言ひ、如何。
- (二) 藤綱は、北條氏の薦事を評して、何と云ひしか。
- (三) 公文の三百貫錢を、藤綱の邸中に投せし、如何なる故ぞ。
- (四) 藤綱は三百貫錢を、如何せしか。

寛大

(例話)

酒井政親は、徳川家康の臣なり、家康參河に居る時、以ちて執事と爲す、新參の士に神谷某と云ふものあり、嘗て政親に途に遇ひてこれに禮せし、政親覺らずして過ぎしが、後、神谷、政親を見る毎に舉止頗倨れり、家康これを聞きて、憚はせ、初め家康、神谷に許す、祿千石を以ちてせしに、是に至り損して八百石と爲す、政親、之を益さんことを

神谷の舉止は倨なりしは、何によれるか。

政親は如何
に對ふかと
思ふか

請ふ、家康曰、彼汝に無禮なるにあらずや、我彼をして自引
き去らしめんと欲す、故に其の祿を損せしなり、汝乃之を
益さんと欲するものは如何ある故ぞ、政親曰、臣不敏にし
て君の靈に頼り罪を執事に待つことを得たり、君の家人
臣を見るに誰か卑遜せざるものぞ、而して彼獨倔強なる
こと此くの如し、願ふに凡庸の士にあらざるべし、一旦君
恩に感せば必能く身を忘れ忠を效さん、臣の見る所を以
ちてすれば宜しく二千石を賜るべしと、家康遂に神谷を
祿するに千五百石を以ちてし、具に政親の言を以ちて之
に告げけき、神谷感泣して退き、政親に詣りて謝したり
しが、神谷後功を以ちて歩卒の將に進みたり。

(格言) 海濶くして魚の躍るゝ従かせ、天空しくして

鳥の飛ぶに任す、大丈夫、此の度量かかるべか
らむ。(身世準繩)

(教授要旨)

- (一) 度量廣く、器局大なるものゝ、漫りに物に怒らずして能く人を容るべ
きこと。
- (二) 能く人を容るゝものゝ、人悦びて服従し、盛徳大業、これに資りて以ち
て成るべきこと。
- (三) 一時の喜怒に因りて、其の人を是非愛憎するゝ、度量狭く、器局小なる
こと。

(教授方法)

高倉天皇の寛大、柳澤里恭の寛大を、本課の豫習教材として、生徒をして
其の大略を説話せしめ、然る後本課の實例を講説し、格言の意解に収結
すべし。

(問詞)

- (一) 神谷某の政親に倨りしハ、何故ぞ。
- (二) 家康、神谷の祿を損せし時、政親ハ如何せしか。
- (三) 政親ハ、何故に已に倨る、神谷の祿を増さんことを、請ひしか。
- (四) 神谷ハ、遂に如何ありしか。

(應用問詞)

- (一) 汝等、往來にて、人に足を踏れなバ、如何よするぞ。
- (二) 友達が、粗相にて、汝等の傘を破りなバ、如何。

(書取題案)

- (一) □ 淵 ○ ○ ○ □ の 躍 ○ ○ □ カ セ □ □ シ シ シ テ □ ノ □ プ ニ □ ス □ □ □ □
□ ノ □ □ ナ カ ル ベ カ ラ ズ
- (二) 神谷感泣 ○ ○ 退 ○ 政親 ○ 詣 ○ ○ 謝 ○ ○ ○ ○ 後果 ○ ○ □ を □ て けり

(作文題案)

- (一) 高倉天皇の寛大

- (二) 柳澤里恭の費大

- (三) 度量局隘なる人を諫むる書牘

義勇

(例話)

上野の國某城主重長、數上杉憲政と戦ふ、然れども衆寡敵せず、常ニ敗を取りしが、其の抗すべからざるを知りて、遂ニ降り、憲政之を別邸に幽し、警戒頗嚴密にして、毫も牢獄と異なる所なかりしかば、重長鬱々として樂まず、一夜慷慨して侍臣に語りて曰、此所に長く幽閉せらるゝ時は、終ハ狂疾を發して死すべし、若今日の如きことあるを知らば、快く戦ひて屍を原野ニ晒すべきに、今に至りて臍を噛むも益なしと、月岡左門、傍に在り之を聞き、膝を進

憲政が重長を幽閉せし有様如何

月岡左門の
一策を問ふ

めて曰、主公近日の憂鬱、察するに餘りあり、臣一策あり之を用ひ給へ、或此の厄を脱することを得べし、其の策は他にあらず、臣今夜自刃して死せん、宜しく主公の身体を薦に包み臣の屍の如くし、臣が首を斬り以ちて門監に示し、佯りて告ぐるに主公憂鬱の餘り狂疾を發し、昨夜侍臣月岡左門を手刃せり、因りて屍を郊外に棄てんとするの意を以ちてすべし、然る時は門監疑はすして之を許さん、主公此の策に因りて恙なく此の地を脱し、再舊地に歸り給ふことを得ば、臣は死するも猶生くるが如しと、重長之を聞き、以爲らく吾が言は是臣下の苦勞を増せしなりと、故に笑ひて曰、前言は戯なりと、翌朝、日既に高く升るも獨左門のみ起き出でざりければ、之を不審とし其の室に

左門の如何
にせしと思ふか

月岡左門の
書の大意を
語れ

至り見るに、果して劍に伏して絶せり、案上は遺書あり、開き見れば中に謂へるあり、曰、昨夜の言、臣素より決死の上にて發せしものなり、然るに主公臣を憐み死を止めんと欲して、言を左右に託し給へり、仁心の厚き臣死するも忘えず、然れども人生誰か死なからん、君の爲國の爲に死すべきは死して餘榮あり、況や仁愛深き主公の爲をや、唯憂ふる所は、臣の死を愛憐し給ふの餘り、踟躕因循、功未成らざるに事已に外に漏ることを、主公幸し微衷を諒せよと、重長始め老臣等其の忠烈と用意の周到なるに感じ、讀み了りて潜然涙を吞みたりしが、時機を失はんことを恐れ、乃直に重長を薦に包みて左門の屍体に擬し、之を近臣に昇らせ老臣其の前に立ち、左門が頭を門監に示して曰、昨

此の計の成
否如何と思
ふか

左近の何の
爲に至りし
と思ふか

夜我が主、狂疾を發し侍臣を手刃せり、困りて其の屍を郊外に棄てんとす、請ふ門を開きて通せしめよと、門監束條左近曰、諾然れども一鏑して屍体を試みずんば門を開き難しと、將し鎗を拵りて之を鏑かんとす、老臣忙しく遮りて曰、左門死せりと雖、豈に他人の槍鋒を甘受せんや、君若門を開くを肯せされば、唯屍を棄つることを止めんのみと、纔し遁辭を設けて引き返せり、其の夜重長主從首を集めて坐し、或左近の忠死を吊し、或脱し歸るの方策を議せしが、忽戸を敲きて訪ふものあり、出で迎ふれば東條左近なり、衆皆愕然たり、左近靜に謂ひて曰、今日の事、僕略之を了察せり、唯門を開くことを肯せざる所以のもの、我が職分を重んぜるのみ、然れども士は各其の主の爲す

長の脱をす
重ること得
しか

るは固より其の所なり、僕、月岡氏の忠死を憐み眠らんと欲して眠ること能はず、深夜竊に來り訪ふ所以のもの、僕が微衷を明さんが爲あり、明日僕ハ病と稱して出勤せざるべし、他の門監ならは秘策或成らん、兄等宜しく明日を以ちて再之を行われよと、滿坐皆左近が明察と遠慮とに歎服せり、翌日門監を見るに果して別人なりしかば、大に喜び更に前策を試みし、難なく宿望を成就することを得て、主從恙なく舊地に脱し歸ることを得たり。

(格言) 危ふきは臨みて懼れず、義に當りて其の身を愛せず、これ君子變に處するの道なり、此の時に於きて、能く勇猛果敢にして奮發すべし。(後篇)

(教授要旨)

(一)事に當りて憶せず、變に臨みて怯れず、勇猛の志氣を奮ひ、以ちて之に應すべきこと。

(二)然れども暴虎馮河の勇氣の、貴ぶに足らず、唯勇氣の正義に中るを貴しと爲すこと。

(三)故に、吾人の國の爲君の爲等にして、我が身を殺して、公共に益することあれば、進みて之に磨り、一步も避けざるべきこと。

(教授方法)

人は常に眞の勇氣を養ひ、一旦國家の急を際しては、挺然一命を抛ちて國家の爲に力を盡さるべからず、若國家の難あるも、恬として顧みざるものは、實に國民たるの義務を缺くものなることを、懇篤に教授すべし。

(問詞)

(一)重長の上杉氏の邸に、幽閉せられしに、何故ぞ。

(二)重長の侍臣に語りし言に、如何。

(三)月岡左門に、如何に對へたりしや。

(四)重長を薦に包みて、門を通らんとせし時、何故に其の計行はれざりしか。

(五)重長主従に、如何にして脱し歸ることを得たりしか。

(作文題案)

(一)匹夫の勇とは如何

(二)男子は務めて義勇の氣象を養成せよ

(三)谷村計助氏の碑を參拜するに誘ふ書牘

立志

(例話)

園源助は京都の人なり、父を久兵衛と曰ふ、家世々、散樂の謠を業とせり、源助少き時、技極めて拙かりければ、父怒りて曰、汝は我が家を繼ぐべきものにあらず、宜しく

源助の家を
出で、如何
にせしと思
ふか

何故に瀑下
に至りて謠
曲を歌ひた
るか

好む所の業を爲し、以ちて其の身の生計を爲すべしと、之を逐ひ出せり、時久兵衛の弟子なる、備前の人某來りて京都に寓せしが、之を憐み携へ歸りて家に養へり、源助一日、徒然の餘り、近邊の佛寺に遊びし、瀑布あり、水勢大にして聲岩に響く、源助見て深く思ふ所あり、其の後毎日瀑布の下に至り坐して歌ふ、然きとも唯瀑布の響甚しきを聞くのみ、斯くて數日を経、歌聲愈幽に瀑音愈高し、源助屈せず、月を重ねければ、聲稍開け、歌能く我が耳に入れり、然きとも瀑音尙高く動もせず、其の曲節を亂さる、源助益精神を鼓し、數月を経るに及び、聲愈開け、歌聲と瀑音と自分明なり、源助心に悦び、勉めて怠らざりしが、三年を経るに及びて、毫も發聲の勞なくして、歌曲自妙を得たり、源

父の源助の
歸りしを見
て如何せし
と思ふか

助以爲らく、稍神に入れり、以ちて家聲を繼ぐに足れりと、主人より乞ひて父の家に入る、久兵衛、我が子の聲を聞き走り出で、迎ひ入れ、直に一曲を命ず、源助其の意に従ふ、聲音清亮にして、曲調、律に合ひ、僕婢皆感聽せり、一曲已に終る、久兵衛手を拍ち喜び曰て、汝が謠は吾より優れり、汝必大に家聲を擧げん、今より家を譲り、業を繼がしむべしと、源助駭き辞すきとも聽かず、遂に家を繼ぐ、是より従ふもの益加り果して大に家聲を揚げたりと云ふ。

(格言) 陽氣の發する所、金石も亦透る、精神一たび到

らば、何事か成らざらん。(韓非子)

(教授要旨)

(一) 凡人徳を崇くし業を建てんと欲せば、當に先其の志を立つべきこと。

- (二) 志を立つるに堅固にして變せず、勉強して息まざるべきこと。
- (三) 志を立つる堅く、業を執る勉むれば、期する所遠大と雖、暢達せざるべきこと。
- (四) 昨日の彼に従事し、今日の此に傾向し、朝夕思念を變じ、業務を更ふるに、志の確立せざるに因ること。

(教授方法)

事を成さんとせば、先志を立つべし。志の定らざるものは、何事にも成ることなし。孟子も志は氣の帥なりと云へる。又あらずや。故に志を立てずして事を成さんとするものは、楫なくして船をやり、銜なきの馬を馳するが如く、漂流奔逸、底止する所なきが如し。されば志を確乎と定め、事に當るの用意肝要なることを教授せよ。

(問詞)

- (一) 久兵衛、何故に源助を逐ひ出ししか。
- (二) 源助、父に逐はれて、如何したるか。

(三) 源助、如何にして謠曲に妙を得しぞ。

(四) 源助、家に歸り、父の命に因り、一曲を謠ひし時、父、如何にせしや。

(應用問詞)

- (一) 志、よくひきたて、學ぶべし。

石にたつ矢のためしきくにも。

此の歌意を問ふ。

(作文題案)

- (一) 立志の必用

10121/

立 志

11011

高等
小學 修身教科書 高等第二級
教師用

明治廿五年五月廿九日印刷
明治廿五年五月三十日出版

正價金拾八錢

著 者 岡村 增太郎

發行 者 兼 大橋 新太郎

日本橋區本石町三丁目拾六番地

東京日本橋區本石町三丁目拾六番地



版權登錄

發兌元博文館

11011

澁江保君著

尋常小學教授法

全一册美本
賣價廿五錢
郵稅二錢

本書●**總論**教育ノ教授ノ目的及其關係ノ取
目次●**第一**論教育ノ必要ナル品位資格○教授上ノ
注意○教授ノ心得○**修身**課談話ノ撰擇○教授上ノ
上注意○發問ノ心○**作文**課談話ノ撰擇○教授上ノ
ノ要件○**算術**課談話ノ撰擇○教授上ノ
課數ノ要○**習字**課談話ノ撰擇○教授上ノ
綱以上

法學士柳川勝二君著

普通道德學

全一册美本
正價拾二錢
郵稅二錢

目次 ●總論 ●道德 ●良心 ●德義 ●責任 ●善及
惡 ●義務 ●德及不德 ●人 ●性命 ●道德法

對スル義務 ● 自然ニ對スル義務 ● 道理ニ對スル義務 ● 自身ニ對スル義務 ● 同族ニ對スル義務 ● 社會ニ對スル義務 ●

普通教育學

全一册美本
正似拾二錢
郵稅二錢

教育家の誠實聰慧あらざるを慨し智育德育養育の諸點を痛論し未だ教育家の思ひ及ばざる所を喝破し大に教育海の流行奴を警む議論靈活措辭雄宕眞に是氣魄煥々萬丈の光明を吐くもの教育界の君子一度本書を繕かば定見節操智識豊富の自治的人物を養成する方法を感悟すべし

大石兵藏君著

初等教育教授法

全一册美本
正價拾二錢
郵稅二錢

斯邊鎮氏ベロヂスター氏の教育論日に冷遇せらるるの今日本書は最近泰西の新奇啓蒙たる新教授案を參照し著者獨得の活眼見識を以て滔々數萬言能く其秩序證例を説き目下普通教育家の爲めに簡明肯綮に正論せり

